

小石川まで (秀眞を訪ふ)

よき人を埋めし跡の墓の石に山茶花散りて掃く人もなし
亡き友の亡きをかなしみ思ひをれば車の上に涙落ちけり
家と家のあはひの坂を登り行けば廣場を前に君が家あり
葉の落ちし櫻を見れば春花の咲きのさかりに來ざりしも惜し
敷物をあつみうれしみ家のごと股さしのべて物うち語る
洋服のやぶれたる著て槌持ちて鍛はんとする人がたあはれ
かぬち君はかぬちのみおや天津麻羅をかしこみと鑄よそのあまつまらを

短歌第六會 (十二月三日)

國風家懇親會

世の歌はたくみの末にかたむきて人丸赤人又出でずけり

火 桶

桐火桶膝に抱へし夜は更けて願熱く歌成らんとす

歳 暮

幾年の長き病のなぐさめに蜜柑もらひて年くれんとす

＊

曉の池は氷にとちられてをし鳥二つ岩の上にあり

明治三十三年

笠

旅行くと都路さかり市川の笠賣る家に笠もとめ著つ
菅笠の小笠かぶりて下總の市路を行けど知る人もなし
武藏野のこがらししぬぎ旅行きし昔の笠を部屋に掛けたり
みすゞ刈る信濃の國の古寺に笠著てまゐる善男善女
裏町の柳の小路往き通ふ蛇の目からかさ春雨のふる
夜嵐に笠うばはれし小山田のそほづの顔は徳利なりけり

さみだれに濡れても植うるさをとめの笠の雫のしげくしおもほゆ
義笠にうき身を隠し行く我を旅商人と人ぞ思ひし
ましらふの鷹据ゑて立つものゝふの笠に音してふる霞かな
もろこしのからの繪を見る思ひあり驢に乗る人の笠の上の雪

茶

冬ごもり茶を飲み居れば活けて置きし一輪薔薇の花散りにけり
ときは木の樫の木植ゑし路地の奥に茶の湯の銅鑪のひびきて聞ゆ
うま酒三輪のくだまきあらんよりは茶を飲む友と寐て語らん
テーブルの足高机うち圍み緑の陰に茶をすゝる夏

夜をこめて物書くわざのくたびれに火を吹きおこし茶を飲みにけり
天にます神を祈りてむつまじく七あるやから朝茶乏しも
茶博士が歌をつくと茶の歌を茶博士つくりつよき歌つくりつ
ひとり居る春のゆふべの酔ざめに茶をかくはしみよき菓子喰ひけり
秋の夜を書よみ居れば離れ屋に茶をひく音のかすかに聞ゆ
閑迦の井の閑迦の水汲み朝な／＼庵の佛に茶をたてまつる

一月短歌會（二月七日）

●

曉の鴛鴦の小文靜かにて園の外面は雪積りけり

鉢に植ゑしことぶき草のさち草の花を埋めて雪ふりにけり
朝日さす森の下道我が行けばはつ枝下枝の雪落つる音

○

ふらんすのばりにゆく繪師送らんと畫をかきてくひ牛くひてかく

久良岐へ（二月十七日）

くちなしの園のあるじに君あはゞ竹の里人よろしくとまをせ

森三十首

鏡なすガラス張窓影透きて上野の森に雪つもる見ゆ
うつせみのひつぎを送る人絶えて谷中の森に日は傾きぬ
谷中路の森の下關我が行けば花うづたかきうま人の墓
踏み知らぬ森の下道日は暮れて逢ふ人をなみいそぎて行きぬ
遠く来てかへり見すれば猶見ゆる谷中の岡の森の上の塔
花に来て遊びし今日の日も暮れて鴉鳴くなり権現の森
おほやけの國の林と百年の斧も入らざる木曾の奥山
森深み山鳥鳴きてたま〜に人に逢ふさへ淋しかりけり
分れたる森の小道に佇みて人も来るやとひとり待ちけり
義仲が兎を狩りて遊びけん木曾の深山は檜の木生ひたり

とみ山の森の木陰の古寺に松嶋見んと我も訪ひ來し
杉むらに白き幟のはの見えて天狗を祭る社ありけり
檜の實を拾ひに行けば檜林むしろ圍ひてかたむ住みけり
墓原の杉の木立を我が行けば夜鳴く鳥に驚かされぬ
風をいたみ絲の緒切れて飛ぶ紙鳶の森越えて行く行くへ知らずも
人取りてくらひきといふぬす人の住みにし森を行けばさよしも
笛の音の遠音をしたひそこはかと森分け行けど人に逢はざりき
藥練る山人尋ね入る山にくしき花咲く森のした草
道のべの檜の林に鶯の二つ来て鳴くあけ方にして
茨咲く森の下陰しめ張らん我が後の世のおくつきどころ

上野山夕越え來れば森暗みけだもの吠ゆるけだものゝ園
いにしへの黄金の殿の残りたる二荒山の杉老いにけり
わが登る愛宕の森の木末よりはるかに見ゆる蟹のつり舟
品川の沖に舟漕ぎかへり見る愛宕の森は今日もかすめり
森越えて鄰の村へ歸るちふ車に乗りぬくたびれし故に
ありそべの松の林に砂掘りて松露の玉を取ればうれしも
ちはやぶる神の木立に月漏りて木の影動くきざはしの上に
蛭の住む森わけ入りて蛭に血を吸はれきといふ蛭物語
夜をこめて驛路行けば荒磯の松の木の間浪のよる見ゆ
朝空にかげろひ立ちて鶯の舞ふ森のかなたに櫻咲くらん

わが病室の障子にガラスを張りてガラス障子の歌よみける中に

いたつきの閨のガラス戸影透きて小松の枝に雀飛ぶ見ゆ
病みこやる閨サイのガラスの窓の内に冬の日さしてさち草咲きぬ
朝な夕なガラスの窓によこたはる上野の森は見れど飽かぬかも
冬ごもる病の床のガラス戸の曇りぬぐへば足袋干せる見ゆ
ビードロのガラス戸すかし向ツイひ家の棟の薺の花咲ける見ゆ
雪見んと思ひし窓のガラス張ガラス曇りて雪見えすけり
病みこもるガラスの窓の窓の外の物干竿に鴉鳴く見ゆ
物干に來居る鴉はガラス戸の内に文書く我見て鳴くか

にひ年の朝日さしけるガラス窓のガラス透影紙爲上る見ゆ
ガラス張りて雪待ち居ればあるあした雪ふりしきて木につもる見ゆ
曉の外の雪見んと人をして窓のガラスの露拭はしむ
常臥に臥せる足なへわがためにガラス戸張りし人よさちあれ
窓の外の蟲さへ見ゆるビードロのガラスの板は神業なるらし

二月短歌會 (二月四日)

紙 書

朝な夕なガラス戸の外に紙爲見えて此頃風の東吹くなり

立 春

冬ごもる机の上の梅の花此頃散りて春立ちにけり

抹茶の事

青墨四ひら半ばの庵建て、薄茶一椀椿一輪

八嶋の歌

下野の那須の與一が放つ矢に扇散り浮く春の浦波

陶 器

すゑもの、釜を開けば百あまり並び立てる女人形
明の人陳元賛がつたへたる尾張の守のおには焼のしひいかも
足利の御代にからより來しといふ瓶の質のたふときろかも

價なき十ひらの皿の一ひらを命なりける皿物語

秀吉はこまのいくさにうちかちてすゑものつくりつれてかへりぬ
すゑものゝ竈をきつきて我好む女人形つくりて世を經ん
淺草の今戸すゑ物つたなけれど西行もつくるゐのしゝもつくる
ふたゝびの七日御墓に詣づれば水仙しをれ茶碗われたり
ぬばたまの黒き小瓶に梅いけて病の牀に春たちにつけり
いたつきの床邊の瓶に梅いけて疊に散りし花も掃はず

梅二十首

紀元節梅 五首

とはつみおやすめらの神が御位に即かす日かしくみ梅いけにけり
日の本のやまとの國のはじまりし其日を今日と梅咲きにけり
日の本の國の祭と賤が家の梅咲く門に旗立てよろこぶ
文つゞる机の上に梅いけてこの日をいはふ日本新聞社
新聞は梅の詩に繪に文に歌にいつれのページも梅なきはあらず

夜 梅 五首

閉したる園の外面の薄月夜梅の林を見て過ぎにけり
わが友はこよひの月に月が瀬や梅散る山に詩を吟すらん
月照す梅の木の間になゝすめばわが衣手の上に影あり
初春のおぼろ月夜をなつかしみ折らんとしたる道の邊の梅

ぬばたまの關に梅が香聞え來て躬恆が歌に似たる春の夜

瓶 梅 五首

砥部燒の乳の色なす花瓶に梅と椿とともに活けたり
墨さびし墨繪の竹の茂り葉の垂れ葉の下に梅いけにけり
縁側に置きし小瓶に花賣がいけてくれたるまばら白梅
瓶にさす梅は散れんと庭にある梅の木咲かず風寒みかも
後の世を願ふ阿彌陀の御佛に薄くれなるの梅たてまつる

東京近郊梅 五首

龜井戸のやしろを出で、野の道を左に曲る臥龍梅の園
いにしへの鞠場が園の名をつぎし梅の林 ● 壽星梅の碑

木下川の流を近み梅園の垣の外面に白帆行くなり

大森の汽車を下りて門を入れれば海を南に梅咲ける岡

遠あるきわらじはきたる若人が蒲田の梅の園に群れたり

羯南氏男子を失へるに

淵にすむ龍のあぎとの白玉を手にとると見し夢はさめけり

愚庵和尚のもとへ

歌をそしり人をのゝしる文を見れば猶ながらへて世にありと思へ
から歌につくりてめでし君が庵の梅の林は今咲くらんか

折にふれて思ひぞいづる君が庵の竹安けきか笠恙なきか

三月短歌會（三月四日）

雜 祭

たらちねのうなる遊びの古雛の紅あせて人老いにけり

花 賣

高どのに春の寒さをたれこめて朝いし居れば花を賣る聲

水 仙

もろこしの女神がつけし白玉のかざしに似たる水仙の花

新 婚 祝

上つ毛の新桑繭の小衾にをし鳥ぬひて君を祝はん

餘 寒

野の中の竹むら陰の葱畑に寒さ残りて梅散りにけり

盆栽菜花

古鉢に植ゑし青菜の花咲きて病の牀に起きてすわりぬ

春 夜

くれなるの緞子の衾かさね著て君と語りし春昔なり

くれなるのとばりをもるゝともし火の光かすかに更くる春の夜

釣香爐圖の末に (三月十八日秀眞へ)

生れながら模様のかたに心得し不折が書ける釣香爐の圖
不折曰く十日あまりの旅の宿に百ばかりかゝん釣香爐の圖
我圖案を不折見て曰く藥玉の釣香爐などはよしてもらひたいかな
來る日の二十日あまりの二日頃にさちをくるとふ君來給はずや

牛

牛が引く神田祭の花車花がたもゆらぐ人がたもゆらぐ
かけまくもあやにかしこきすめろぎの御親の柩挽きし牛はも
春の夜の網代の車軋らせて牛追ふ人の聲おぼろなり

親牛の乳をしぼらんと朝行けば飢ゑて人呼ぶ牛の子あはれ
母牛のうま乳飲まんとさわぐ子を追ひはらひたる人の親の心
うぶすなの石の鳥居を引きて行く牛の力は神力かも
古國の伊豫の二名に馬はあれど牛がしろかく堅土にして
牛群れて歸る夏野の夕ばえのかゝやく色をたくみに畫きぬ
スバニアのますらたけりをけだものゝ牛と闘ふますらたけり男
八千卷の書讀み盡きて蚊の如く瘦すゝ生ける君牛を喰へ

春 雨

葛飾の小梅の里の小田ぞひに春雨小傘行くは誰が妹

江の嶋へ通ふ海原路絶えてみちくる春の汐の上の雨
同じ窓にまなぶわらべの櫻見にむれてくる日を雨ふりいでぬ
ともし火の光に照す窓の外の牡丹にそゞぐ春の夜の雨
霜おほひの葉とりすつる芍薬の芽の紅に春の雨ふる

艶麗といふ題にて

春の夜の衣桁に掛けし錦欄のぬひの孔雀を照すともし火
玉飾る高殿更けてたき物のにほひに曇る春の夜の月
つくり花の牡丹の花を手に持ちて踊りつれたる二むら少女
君が倚る朱のおぼしま小夜更けて雪洞の火に櫻散るなり

海棠の花咲く庭のをりの内に孔雀の鳥の雌雄を飼ひたり
青鳥の孔雀の鳥が笠の如くうちひろげたるしだり尾の玉
山川を埋めてふれる雪の中に咲ける牡丹の花只一つ
くれなるのとばり垂れたる窓の内に薔薇の香満ちてひとり寐る少女
くれなるの薄色匂ふ薔薇の花を折りて手に持ちて香を嗅ぐ少女
美人問へば鸚鵡答へず鸚鵡問へば美人答へず春の日暮れぬ

○

山の池の水際におふる篠の群の死ぬとも君に逢はんとぞ思ふ

左千夫へ

豎川の茅場の庵に君着かば二十日の月い野を出でぬらん
我庵の硯の箱に忘れありし眼鏡取りに來歌よみがてら
吾妹子をなほし見まほしと思へども眼鏡忘れて見れども見らえね

184

我室

草枕旅路さぶしくふる雨に董咲く野を行きし時の叢
赤紙にいはひ言書き壁に貼りてをぎたてまつるさちはひの神

日の本の陸奥の守より法の王バツバボウロに贈る玉づさ
もろこしの蘇うちが書ける石文の石摺の下の水仙の鉢
花の繪を我に残しゝ山の井の浅井の君はスエス行くらん
まだ浅き春をこもりしガラス戸に寒き嵐の松を吹く見ゆ
アムールの川の川原のさゞれ石をひろひて寄せし君をおもほゆ
落の花植ゑし小鉢のかたはらに取り亂したる俳書歌書字書

185

我家の長物

ある時はひゝなを祭りある時は花瓶を置く眞黒小机
フランスの人が造りしビードロの一輪ざしに椿ふさはず

もろこしのからのみやげにもらひたる濃き紫の月がた團扇
いにしへのからの瓦に彫りきとふ文字をうつし、茶托四五枚
からかねの茶托のかたに鑄いだし、落花水面皆文章の句意
つり籠の鶉取らんと飛びかゝるあなにく小猫棒くらはせん
カナリヤのつがひは逃げしとやの内にはひわのつがひを飼へど子生ます
朝な夕な字書きふみ讀むかたはらに萌黄の鳥の木にとまり居り
から酒に蟹ひてありし溢色の低き小瓶に梅をいけたり
何がしの佐兵衛が鑄たる霰釜の箱書したる山城屋市兵衛

四月短歌會（四月一日）

星

久方の天つ少女が住むといふ星の都に行かんとぞ思ふ

柳

草枕旅行く君を送り來て橋の柳の下に別れぬ

花見茶香

赤染の下著あらはに樽提げし嶋田男に花散りかゝる

剝製の鳥

菅の根の長き春日を言問はぬ小鳥と我と只向ひ居り

富士牧狩

あづま路のあづまものゝふあともひて富士の裾野に御獵すらしも

夕日影照り返したる山陰の桃の林に煙立ちけり

ものゝけの栖むといふなる古家の檜端の柳伐り捨てにけり

鎌倉懐古

鎌倉の松葉が谷の道の邊に法を説きたる日蓮大菩薩

鎌倉にわが来て見れば宮も寺も賤の藁屋も梅咲きにけり

獄中の鼠骨を憶ふ

ある日君わが草の戸をおとづれて人屋に行くとき告げて去りけり

御あがたの大きつかさをあなどりて罪なはれぬと聞けばかしこし

天地に愧ぢせぬ罪を犯したる君麻繩につながれにけり

大御代都邊のまがねの人屋廣ければ君を容れけりぬす人と共に

君が居るまがねの窓は狭けれど天地のごとゆたけくおもほゆ

くろかねの人屋の飯の黒飯もわが大君のめぐみとおもへ

豆の事をグンバ(軍馬)といふと人に聞きし人屋の豆のグンバ喰ふらん

人屋なる君を思へば眞晝餉の肴の上に涙落ちけり

三とせ臥す我にたぐへてくるかねの人屋にこもる君をあはれむ

ぬば玉のやみの人屋に繫がれし君を思へば鐘鳴りわたる

週間記事

三月二十八日 (午後雷降る)

うらゝかにガラスを照す春の日にはかに曇り雹ふりきたる

三月二十九日 (「我病」を草す)

ともし火のもとに長ぶみ書き居れば鶯鳴きぬ夜や明けぬらん

三月三十日 (把果来る)

詩をつくる友一人来て青柳に燕飛ぶ晝をかきていにけり

三月三十一日 (淺草公園失火の新聞)

翁さび火鉢かへして狸々が火事おこしきと聞けば可笑しも

四月一日 (短歌月次例会)

歌をよみにつどひし人の歸る夜半を花を催す雨瀧の如し

四月二日 (湖村、節、四方太来る)

詩人去れば歌人座にあり歌人去れば俳人來り永き日暮れぬ

四月三日 (實方墓邊の藪柑子を送り来る)

實方の墓邊に生ひしやぶかうじ人に抜かれて歌によまれけり

病牀十日の内

四月四日 (春暖かに體温高し)

飼鳥の小鳥の餌にと植るおきし庭の小松菜花咲きにけり

四月六日 (宋景祁の畫帖を見る)

から桃の花をいけたるかたはらに玉の小櫛を取りあはせし圖

四月八日 (俳句會)

句つくり今日來ぬ人は牛嶋の花の茶店に餅くひ居らん

四月十日 (終日雨)

ガラス戸の外さびしくふる雨に鄰の櫻ぬれはえて見ゆ

四月十二日 (左千夫來り夜一時頃去る)

歌がたり夜はふけにけり堅川の君が庵に牛の乳取る頃

秀真へ (四月十日)

土がたにうつしかたどる我顔の少しゆがみて猶面白し

土がたを入れたる罐を携へて秀真がり行く途中氣をつけよ

此次に何をこねんか驚く莫れ大慈大悲の觀世音菩薩

觀音を寫生なさんと思へども觀音あらず似たる女もが

方丈の室にこもりて捏ねんと思ふ二丈五尺の土の盧舍那佛

碧梧桐へ (四月十三日)

飄亭と鼠骨と盧子と君と我と鄙鮮くはん十四日夕

病牀週間記事

四月十四日 (鼠骨の出獄を祝す)

くろがねの人屋を出でし君のために笥餅をつけてうたげす

四月十五日 (萬葉集論會)

山吹の花咲く宿に萬葉の歌の講義の會を開きぬ

四月十六日 (壺中の粘土を取出て)

常臥の病のひまのつれづくに土をつぐねて人を造りぬ

四月十七日 (蕨を贈り来る)

土がたの人造り居るかたはらに盆に載せたるさ蕨十把

四月十八日 (置物臺を造る)

ともし火のもとに臥し居て土くれに六ひらの花をあまた彫りたり

四月十九日 (湯さまし様の器を造る)

遠がたのうつはのへりに付けそへし蜻蛉の尻を曲げて手となす

四月二十日 (庭前に大鳥籠を据ゑて)

かな網の大鳥かごをつくろひて小鳥を入れん明日の朝待たる

今成文平へ (四月十七日)

青疊青色あせし我庵に君がめぐみのくらしの皮
くらしの羊の皮をわが敷きて鄰の櫻見れば樂しも

左千夫へ（四月十八日）

夜にしなれば病みこやる身の熱はあれど歌の手紙を二つ書きたり
歌會にこやるといひて笑はれて書きしこやるの解は正しも

自作土像（秀真へ）

我顔を鏡に寫し其顔を土にかたどり土の坊主成る
我顔を鏡に寫しかたとりし竹の里人手つくねの像
我顔を見てかたとりし土かたは我顔に似すあらぬ人に似る
渾沌が二つに分れ天となり土となるその土がたわれは

悟不悟の歌（左千夫に贈る）

茶博士をいやしき人と牛飼をたふとき業と知る時花咲く
本庄の四ツ目に咲けるくれなるの牡丹燃やして悪き歌を焚け
寒山拾得豊干皆非なり鉢栽の小櫻草の花綻びぬ
頭痛み寐ころびて見る抱一の古繪の椿花玉の如し
龜井戸の藤のさかりに群れ遊ぶ振袖少女うつくしと見すや
一もじの葱の青銚ふり立てゝ悪歌よみを打ちてしやまん

秀真へかへし（四月二十日）

ほら／＼にほらに造りてほらあたまのうつろあたまとなすべきものを

みち足れるおもたきあたまた穴をなみ焼くとも焼けじか焼かずともよし
いかにして石膏に取るか殊の外に手数かゝらば取らずともよし
きのふわが造りしものを何と思ふ観音にあらず大佛にあらず
きのふわが造りしものは人がたを載せて置くべく花彫りし臺
その花は六ひらの花、その葉は牡丹の葉、花と葉と思ひあはず、葉のあひに
花ぞ咲きける、へな土をこねて造りし、花なれば名をだに知らず、造り花あ
はれ

碧梧桐の歸郷を送る

東路の都の花の眞盛りをしまらく君と別れてあらん

支那に行く人を送る

國寶つるぎ携へからへ行く君を送りぬ花咲く四月
ゐの子人からのますらをはげましてオロシヤ國人國の外に追へ

臺灣に行く人を送る

フオルモサの高砂嶋に君行かば嶋人さびてバナナくふらん

龍へ

茶店には茶の木を植ゑ、圓子屋にヒヨンの木を植ゑ、茶の木には白紙をつけ、
ヒヨンの木に赤紙をゆひ、白紙に上の句を書き、赤紙に下の句しるし、其紙

をよりあはせて、其こよりかひなに巻き、妹が手を右に握り、妹が棲左に取り、晝行かば人言しげみ、夜行かば月をやさしみ、晝も夜も家にこもりて、さゝめ言戸を漏れ來れば、茶の木もゑまひことほぎ、ヒヨンの木もさちはひよろこび、歌よめと我に迫れば、二ツ木のまけのまにく、歌よみてよごとをまをす、あゝ君が代やあゝ

歌よみておくれと君がいひし故に歌よみておくる歌よみてかへせ

長塚節へ（四月二十一日）

竹むらにかくれて生ふる山樹の芽のからくも君にこひわたるかも

櫻花三十首

櫻咲く御國しらすと百敷の千代田の宮に神ながらいます

櫻咲く濱びの宮に外つ國の使等召して大御言たまふ

さす竹のみ子のみことの大美女をめすらん年と花さきさかゆ

高砂の新高山に咲く花はやまとの花に似て似ざりちふ

み城のもとのいやしき民は櫻咲く上野の園に出でし遊ぶ

八ちまたのちまたの櫻花咲きて都の空は夕曇りせり

岡の上に天凌ぎ立つ御佛の御肩にかゝる花の白雲

黄金塗り丹塗り青塗る御靈屋の鳥居うづめて花咲きにけり

御靈屋の杉の林の陰に咲く老い朽ち櫻花の乏しき

人群るゝ花の林を歩き過ぎて杉の木の間に鳴く鳥聞ゆ

雨にして上野の山をわがこせば幌のすき間よ花の散る見ゆ
小夜ふけて櫻が岡をわが行けば櫻疊りの薄月の暈
櫻咲く上野の岡ゆ見おろせば根岸の里に柳垂れたり
くれ竹の根岸の里にかくれたる人を訪ふ日の薄花曇
玉川のながれを引ける小金井の櫻の花は葉ながら咲けり
大川の川のつゝみに咲く花の薄花雲はたなびきにけり
春の日のみ空くもりて隅田川櫻の影はうつらざりけり
櫻咲く隅田の堤人をしげみ白鬚までは行かで歸りぬ
足柄の山の櫻をねもごろに見まく思へど汽車とどまらず
雨そゞぐ櫻の陰のにはたづみよどむ花あり流るゝ花あり

我宿の山吹咲きて向つ家の一重櫻は葉となりにけり
ひがし風にはかに吹けば古杉の林の前を花飛びわたる
家へだつをちの木末に咲く花をい吹きまどはし我庭に散る
年長く病みしわたれば花をこひ上野に行けば花なかりけり
ガラス戸の外に植ゑおける櫻花ふゝむ咲く散る目もかれず見き
たまゝに病のひまに花見んと端居する日の晴れて曇りぬ
久方の空曇る日の櫻花ま咲きしみ咲きいまだ散らなく
花散りて葉いまだ萌えぬ小櫻の赤きうてなにふる雨やまず
からかさの借りのむくい庭櫻のあたり太枝折りておこしぬ
白きにはえ赤きにはほふ遠里の櫻の色に繪かきは惑ふ

一日一詠

四月二十一日 (庭上に大鳥籠を掲げて)

かな網の鳥籠廣みうれしげに飛ぶ鳥見れば我もたぬしむ

四月二十三日 (塑像石膏像三個)

ともし火の光さしたる壁の上に土人がたの影うつりけり

四月二十五日 (長塚節より桜の芽を贈り来る)

年の夜のいわしのかしらさすといふたらの木の芽をゆで喰ひけり

四月二十七日 (事無し)

鳥籠のかたへに置ける鉢に咲く薄紫のをだまきの花

四月二十九日 (龜井戸に遊ぶ)

廣前の御池に垂るゝ藤の花かづらくべくはいまだみじかし

小金井遠乗

司等がむさぼる筈飯のこなれがたみ花を見て來の御言のかしこさ

同等の足搔の音に田居中にはらばふ牛の夢さめにけり

小金井の櫻はいまだ見えなくに腰骨いたし馬しましとめ

千里行く龍の荒馬はうま人をゆり落さんとたけりにたける

うま人が馬踏みはづし落ちにけん其あところしめ立てゝ置け

おのもく 櫻かざしてかへり來る四位のかゝぶり五位のかゝぶり

左千夫より牡丹二鉢を贈り来る一つは紅薄くして明石潟と名づけ一つは色濃くして日の扉と名づく

いたつきに病みふせるわが枕邊に牡丹の花のい照りかゞやく
病みふせるわが枕邊に運び来る鉢の牡丹の花ゆれやます
くれなるの光をはなつから草の牡丹の花は花のおほざみ

庭前即景 (四月二十一日作)

山吹は南垣根に菜の花は東堺に咲きむかひけり
かな網の大鳥籠に木を栽ゑてほつ枝下枝に鶺鴒飛びわたる
くれなるの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる

汽車の音の走り過ぎたる垣の外の萌ゆる木末に煙うづまく
杉垣をあさり青菜の花を踏み松へ飛びたる四十雀二羽
一うねの青菜の花の咲き満る小庭の空に鳶舞ふ春日
くれなるの若葉ひろがる鉢植の牡丹のつばみいまだなかりけり
春雨をふくめる空の薄曇山吹の花の枝もうごかず
家主の植ゑて置きたる我庭の背低若松若みどり立つ
も草の萌えいづる庭のかたはらの松の木陰に菜の花咲きぬ

五月短歌會 (五月六日)

妹が著る水色衣の衣裏の薄色見えて夏は來にけり

あて人の住める御殿の塀長く椎の梢に鯉ひるがへる
かな網のとぐらの下を行く猫に木を飛びまどひ諸鳥騒ぐ
高瓶にさせる牡丹のこき花の一ひら散りて二ひら散りぬ

観艦式

船見せすわが大君の大御前に玉さゝぐらんわたつみの神

芝居

花道の橋かけ道ゆ出できたるわざをぎ人の名を呼びはやす
ますらををくはし少女によそほひて情こころの多き人を泣かしむ
都邊のかぶきわざをぎ見し事を妹にかたらん夜をしぞ待たる

龜戸まで

我庭の萩の上葉に秋風の吹くらん時を待てばくるしも
小車の車ゆらゝに見て過ぐる垣内の梅の實豆の如し
をちこちに鯉のふきぬき吹きかへす五月五日は近づきにけり
くろかねの橋の上つ瀬下つ瀬にむしろ帆群れて川さかのぼる
たて川の茅場の庵を訪ひ來れば留守の門邊に柳垂れたり
御社の藤の花房長き日をはりこづくりの龜が首ふる
掘りかへす神の古池水をなみ橋行く人の影もうつらす
藤波は花にしありけり波の花は皿に盛りたる鹽にしありけり
つゝみある身のさかしらに遠く來てそゞろに寒き藤の下風

げんくの花咲く原のかたはらに家鴨飼ひたるきたなき池あり
繪を見るに猶しおもほゆ三吉野の吉野の山の花のあけぼの
茶博士が住みける庭の松の木に棒をくゝりて押しかたむけあり

體溫日記

五月一日 (體溫三十九度六分)

山吹は散り菜の花は實になりて五月一日われ厄に入る

五月二日 (體溫三十九度一分、從弟來)

みすゞ刈る信濃の奥の白坂に雪は降りしと蕨萌ゆちイとふ

五月三日 (體溫三十八度九分)

病み臥せる床にさゝんとおぎのりし菖蒲匂ひ葉根はなかりけり

五月四日 (體溫三十九度六分、俳句會)

「藤の花長うして雨ふらんとす」とつくりし我句人は取らざりき

五月五日 (體溫三十八度二分)

たて川のさちをがりより贈り來し牡丹の花に文結びあり

五月六日 (體溫三十九度四分)

鉢植に二つ咲きたる牡丹の花くれなる深く夏立ちにけり

五月七日 (體溫三十八度五分)

はしきやし少女に似たるくれなるの牡丹の陰にうつく眠る

五月八日 (福井大火囃覧翁遺稿焼失せるよし)

かぐつちのあらぶる神のあらぶると玉も瓦も共に焼きけり

五月十日（東宮御慶事）

敷島の國つ御民の祝ふ日を祝ふやわれもあけのこはいひ

五月十二日（虚子の子來る）

高濱の濱の眞砂の名にしおふみどり子まさ子我になじます

東宮御婚儀を祝する歌

おのころや天の柱を、御國の中つ柱と、左ゆ左めぐり、みざりゆみざりめぐり、言あげの御言よろしみ、生みませる嶋の八嶋を、すめみまの御子つぎつぎの、をす國とのらせ給ひし、いひしらす古き神代ゆ、天地の絶ゆる事なく、日と月と照りあふがごと、い並びてをさめ給へば、をの道はたけくあきらけ

く、めの道はなびかひ従ひ、玉くしげ二つの道を、今もかも日つぎの御子の、みめ召すと定めゆらせ、日はあれど今日の足り日を、みあひます日のよき日と、八百萬千萬神の、神はかり告げのまにく、大宮のかしこどころの、大前に真神をなへ、うたのかみ笛吹きならし、のりとづかさのりとを申し、神契り契りたまへば、宮人はうなねつきぬき、司等は膝折りふせ、言のきはみほぎ言ほぎ、品をつくし品たてまつる、とつ國のおほやけ使、彼皆も廣ぬかづきて、言さやぐよごとまをせば、賤しけど御民我等も、旗かゝげ門に灯ともし、千世ませとあがいはへば、天地も答へて呼びぬ、八千世ませとあがことほげば、草も木も共にどよみぬ、君が代のさかゆるさがと、紫の色なつかしみ、藤波の花かづらきて、をし鳥の袖うちかはし、歌ひ舞ひ賤もたぬしむ、文字もなき賤にしあれど、めをの道はやも

すめろぎの御子のみことと大み女と玉申さゝげ神ちぎります
さす竹の宮人祝ふ今日の日に藤をかざして民もよろこぶ

くれなゐと真白と並び咲く花の牡丹も君をことほぐが如し

藤花

百花の千花を絲につらぬける藤の花房長く垂れたり
廣庭の松の木末にさく藤の花もろ向けて夕風吹くも
廣前の池の水際にしだれたる藤の末花鬢にさやりぬ
公達がうたげの庭の藤波を折りてかざさば地に垂れんかも
池の邊のさじきに垂るゝ藤の花見れば長けく折れば短し
吾妹子が心をこめて結びにし藤波の花解かまくをしも
吾妹子が手馴の琴の絲の緒と長さあらず藤波の花

曇

吾庵の檐端にかけし烏籠の鳥さへづらず春の日曇る
天地のそぐへのきはみ晴れわたり舟群るゝ江の俄に曇る
久方の曇り拂ひて朝日子のうらゝに照す山吹の花
古里の御寺見めぐる永き日の菜の花曇雨となりけり
八汐路の海をへだてゝつらなれる紀伊の國山曇りて暮れぬ

鼠骨入獄談

同じ朝繩許されしぬす人と人屋の門をいでて別れぬ
くろがねの人屋の門をいでくれば桃くれなゐに麥緑なり

かげろひのはかなき命ながらへて人屋をいでし君瘦せにけり
人屋にて君がみがきしたほばさみたばにはさまん少女子いづら
都への花のさかりを十日あまリイまり五日人屋の内に泣きけり
はなたれて人屋の門をいでくれば茶屋の女の小手招きすも
ぬば玉のヤミのひじきは北蝦夷のダルマの豆にいたくし劣れり
春鳥の集鳴の人屋塀を高め青き麥生の畑も見えなくに

秀真へ（五月十日）

今日ゆのち新聞おくる新聞の月々の代は拂ふに及ばず

原千代子きのふ來りてくさくさの話きいたりかすてら喰ひつゝ

たて川のさちをよべ來てくさくさの話ありたり君が身につきて
なりはひも大事なりけりつきあひも大事なりけり名をあぐるにしかず

舟中作（五月二十日課題）

川下る我舟早みつゝし咲く岸邊岩垣走るが如し
川下る乗合小舟夜を深み人皆寐ねて楫の音聞ゆ
から國ゆ歸りし船の舳に立ちて須磨の濱松見ればうれしも
栲繩の帆綱手にとり立つ人の足もしどろに波船を揺る
八百日行く沙路たゞよひとつ國の知らぬ嶋へにはてし我舟を
生けりとしも我思ほえず久方の空傾けて大浪來る

船長の船部屋狭み姿見の鏡の前に薔薇の鉢置きり
川下る舟に乗る夜の風寒み萩の葉さやぎ月傾きぬ
眞北さし八百日八汐路行く船の帆桁の上に北斗を仰ぐ
遠つ海いわたる人の舳にむれて安き船路をおのゝことほぐ

五月二十一日朝雨中庭前の松を見て作る

松の葉の細き葉毎に置く露の千露もゆらに玉もこぼれず
松の葉の葉毎に結ぶ白露の置きてはこぼれこぼれては置く
緑立つ小松が枝にふる雨の雫こぼれて下草に落つ
松の葉の葉さきを細み置く露のたまりもあへず白玉散るも

青松の横はふ枝にふる雨に露の白玉ぬかぬ葉もなし
もろ繁る松葉の針のとがり葉のとがりし處白玉結ぶ
玉松の松の葉毎に置く露のまねくこぼれて雨ふりしきる
庭中の松の葉におく白露の今か落ちんと見れども落ちず
若松^{稚イ}の立枝はひ枝の枝毎の葉毎に置ける露のしげけく
松の葉の葉なみにぬける白露はあこが腕輪の玉にかも似る

煙

都べの愛宕の山に、のぼり立ち國原見れば、大家に煙ふとしり、小家には細
くなびかひ、十よろづの籠ことごとく、燃ゆる火の消ゆる事なく、いや日けに
さか^さかる^ちまた^にい^い、^{住める}あひ^し我^かも^も

○

おくつきにそなへし花の古花を集めて焼けば青煙立つ
もみぢ葉の過ぎにし人を火にはふる月夜さやけみ煙は惑ふ
そらだきの伽羅の煙は瓶にさす椿の花をめぐりてなびく
春花の色に匂へる吾妹子は空の煙と立ち上りけり

旋頭歌二首

おしてゐるや難波入江に風南吹き空に立つ千筋の煙片なびきすも
天水のよりあひのきはみ煙立つ見ゆ吾妹子を載せたる船の今か來らしも

ほととぎす

さみだれの關の山道たどり行く松明消えて鳴くほととぎす
ガラス戸の外面に夜の森見えて清けき月に鳴くほととぎす
ほととぎす其一聲の玉ならば耳輪にぬきてとはに聞かまし
みづらなる湯津爪櫛の一つ火の消えなんとして鳴くほととぎす
いにしへの人も聞きけん名どころの古ほととぎす聲嘎れて鳴く
橘の花酒に浮けうたげする夜くだち鳴かぬ山ほととぎす
葛城のみ谷に眠るゐのしゝの軒の上に鳴くほととぎす
みやびをのつどへる宵のむら雨に鳴けほととぎす歌幸を得ん
蓬生の露わけ車立てさせて格子叩けば鳴くほととぎす
五月雨の雨ふりそゝぐ紫の花あやめ田に鳴くほととぎす

道のへの稻荷の森に雨やどりたゝすみをればなくほとゝぎす

秀真へ（五月三十一日）

一さかの壺にみてたるはに土をつぐねんとしていまだつぐねず
面の皮千ひらかさねし我面はもゆるほのほに焼くとも焼けじ

六月三日麓宅園遊會にまかりて

（六月三日麓宅の園遊歌會に集まるもの三十人我も其一人なり即事十首の課題成らで別に歌玉の歌十二首を作る其内
い）

もろ人のもろ吐きうつる歌玉といちごの玉とかすを争ふ

庭守は翌な掃きうて歌玉の落ちてぞあらん木陰石陰

枇杷黄玉覆盆子赤玉何はあれど光を放つ歌の白玉

みやびをの歌のみことが吐きうつるいぶきの霧に白玉散るも

歌玉は色々あれど秀真のは白く左千夫は黒くしありけり

格堂はルビーか巴子はトバツツかあるじ麓は出雲青玉

茂春、節、一五坊、不可得、四つの玉飛びてあたりて碎けて散りぬ

のみこみし團子の玉は歌玉となりて出でけり神わざなるらし

團子の骨ピールの屍散り亂れ歌玉いくさ日は夕なり

歌玉の清めるは上り星となり濁るは沈み松露とぞなる

歌玉の潮音三子其色は眞白赤斑と眞赤白斑と

六月七日夜病牀即事

ほととぎす鳴くに首あげガラス戸の外を見ればよき月夜なり
ガラス戸の外に据ゑたる鳥籠のブリキの屋根に月うつる見ゆ
ガラス戸の外は月あかし森の上に白雲長くたなびける見ゆ
ガラス戸の外は月夜をながむれどランプの影のうつりて見えす
紙をもてランプおほへばガラス戸の外は月夜のあきらけく見ゆ
浅き夜の月影清み森をなす杉の木末の高き低き見ゆ
夜の床に寐ながら見ゆるガラス戸の外あきらかに月更けわたる
小庇にかくれて月の見えざるを一目を見んとゐざれど見えす
照る月の位置かはりけん鳥籠の屋根に映りし影なくなりぬ

月照す上野の森を見つゝあれば家ゆるがして汽車往き返る

讀平家物語

宇治川 六首

ぬば玉の黒毛の駒の太腹に雪解の波のさかまき來る
飛ぶ鳥の先を争ふものゝふの鎧の袖に波ほとばしる
宇治川の早瀬よこぎるいけじきの馬の立髪浪こえにけり
橋の小嶋が崎のかなたよりいかけ引きかけ武者二騎來る
ものゝふのかためきびしき宇治川の水嵩まさりて橋なかりけり
先がけのいさを立てずば生きてあらじと誓へる心いけじき知るも

九重の雲居をいで、藤さけるしきなが濱に御船はてけり
藤さけるしきなが濱に風ふけば御船によする紫の浪
夏に入る旅なれ衣ぬぎもかへず磯の藤浪折てたてまつる
松ながら折りてさゝげし藤浪の花はむしろを引きずりにけり
君がみゆきありともしらで吉備の國の荒磯べたに藤咲きにけん
よろづ代をいはひて折りし松が枝に二房垂るゝ藤浪の花
松が枝を折りてさゝぐる御やつこの其手震へか藤浪ゆらぐ
龍がたの御船にまけし玉しきの御座の下に藤たてまつる
みつかさの折りてさゝぐる松が枝に長きみじかき藤浪の花

藤の花さゝげもちたるみやつこそをのせて漕ぎ來る棚なし小舟
大君の御前にしほむ紫の藤浪の花すてまくをしも

左千夫へ (六月八日)

今日や來ます明日やきますと思ひつゝ病の床に下待ちこがる
十日は發句の會なり九日の朝からきませ茶は買ひてあり

格堂へ (六月十二日)

「國力」の歌の事に就き話あり學校學課ひまな時に來
「國力」に歌を出すとしておのが歌ばかりな出だし歌はよくとも

日光山

白雲の深くこもれる二荒の山より落つる七十二瀧
夏山の茂きに光る玉の宮再び來り見れども飽かず

風 (三人根岸草庵に會し庭前の風といふ題にてイ)

向つ尾の杉の梢に居る鳶のふみどたわゝに風吹きゆする
日和風そよ吹き過ぎて若松のむら立ち青芽むらゝ動く
ありなしの風か過ぎけん椎の葉の若葉三葉四葉動きてやみぬ
ガラス戸をゆるがすいに音する夜の風荒れて庭木の梢ふいゆれさわぐ見ゆ

さ庭べの草木動かし吹き過ぐる風しづまりて薔薇の花散る
杉垣の垣外に見ゆる若竹の末葉うらまばらに風吹きわたる
向つ尾の上野の杉を吹く風のしばしまゆとりて庭の木を吹く
白玉の眞白さゝ花吸ふ蝶の吹きまどほさえ又飛び返る
常臥の病のひまを端居してさ庭べ見れば草に風あり
さ庭べの松の葉に置く白露の玉吹き散らす上野ろ風

神 (六月十七日短歌會)

歌の神の御手を開けば吹く風に露の散るごと白玉の散る
足引の山の御神の山移りいでましの雨に朝花洗ふ

紅の花みてる野に月出で、神の子が吹くくだの音聞ゆ
御いくさの神が取り持つ御劔のさきゆしたゝる血の雨はげし

漱石へ（六月二十一日）

年を経て君し歸らば山陰のわがおくつきに草むしをらん
風もらぬ釘つけ箱に入れて來し夏だい／＼はくさりてありけり

浅井忠へ（六月二十五日）

くれ竹の根岸の豚はうまからすばりす思へば涎し流る

佐々木弘綱十年祭

世のなかに歌學全書をひろめたる功に報いん五位のかゝぶり

七月短歌會（七月一日）

緑羽の蠅のみことが蠅つどひ黄尿クワノの響をきこしをす見ゆ
廻われ白絲手繰り機織りていくさの君に布たてまつる

送大我從軍

薄織の夏著の衣のかくしどに筆さし入れていくさに行くも
言さへぐから山越えていくさ見に再び行くを再び送る

繪師なにかし繪をかく傍より左千夫節と共に其讀をかく讀の歌若干

朝顔の繪に

うがひすと夜の衣を脱ぎもあへず端居の風の秋近づきぬ
曉のおきのすさみに筆とりて繪がきし花の藍薄かりき

雪に雀の繪

曉の長寐し居ればよべの間に雪つもりぬと妻來て告げぬ

橋欄に月の繪

住吉の神のそり橋夕されば松の木の間に細き月見ゆ

左千夫へ (七月十日)

豎川の流れ溢れて君が庵の庭の木賊に水は越えずや

七月第二會 (七月十五日)

草市の市の日向にしをれたるみそ萩の花買ふ人もなし
魂祭る手向青草おぎのると三橋の市に雨に逢ひにけり

冷笑の歌六首の内 (七月二十三日左千夫へ)

葉すきの紙にもあるか君が身は瀧見に行かず雨づゝみする
さみだれの篠つく雨に傘さして華嚴の瀧を見ざるを惜む
落瀧津瀧のとゞろき岩震ひ毛驢震ひて沁りて落ちそ

星

眞砂なす數なき星の其中に吾に向ひて光る星あり
たらちねの母がなりたる母星の子を思ふ光我を照せり
玉水の雫絶えたる檐の端に星かゞやきて長雨はれぬ
久方の雲空イの柱につる絲の結び目解けて星落ち來る
空はかる臺の上に登り立つ我をめぐりて星かゞやけり
天地に月人男照り透り星の少女のかくれて見えす
久方の星の光の清き夜にそことも知らず驚鳴きわたる
久方の空をはなれて光りつゝ飛び行く星のゆくへ知らずも

ぬば玉の牛飼星と白ゆふの機織姫とけふこひわたる

富士に登らずして故郷に歸る格堂に贈る

駿河なる富士の高嶺に、のぼりたち峰の八尾踏み、岩陰に残れる雪を、神わざとくゑはらゝかし、其雪の吹雪となりて、ひんがしの都をおほひ、暑き日に病みてなやめる、我庵にふりもくるかと、今日も待ち明日も待たんを、其山に登りても見ず、たらちねの母の國へと、ひた走るかも

富士のねに咲ける薊を吉備にある親に見せんと君思はずや

南のいよの出湯は遠つ神六代の帝のいでましどころ

編 編

山陰の佛の岩屋晝くらくかはほり住みて行く人もなし

左千夫へ (八月八日)

「晝寐の日面會の日と分ちけり」の紙吹き返す秋の初風

(白露や家こぼちたる萱の上 蕪村)

きのふ迄ありにし家はこぼたれて萱の上なる露の白玉

格堂が平賀元義の歌送りこしける返り事に

上にして田安宗武下にして平賀元義歌よみ二人

血をはきし病の床のつれづれに元義の歌よめばたのしもうれイ

秋水が佛足石の碑の石摺贈りこしける返り事に戯れに我手の形を紙におして送る

御佛の足のあとかた石に彫り歌も彫りたり後の世のため

我手形紙におしつけ見てあれど雲も起らずたゞ人にして

八月第二短歌會 (八月十九日)

嵐ふく闇のいさり火亂れつゝ黒戸の沖に鯛釣るらんか

八月二十二日

恆には哉を罵る紅の廣長舌ヒロナガジマのすくみて動かす

瀧

もろ駒のおくれさきだち小倉山雲蹈みわけて瀧見にゆくも(霧降)

九月短歌會(九月二日)

棹幼兒

みづくし女の子みづ子はたらちねの父母をおきて隠れけるはや

早

雨もなき早の庭の焼土にこがれて立てる撫子の花

狐の婚禮

青空にむら雨すぐる馬時狐の大王妻めすらんか

十月短歌會

御選宮

みもすその宮のみうつし今あれや賤が伏屋に神雨ふるも
神御魂遷しまつらくさしげ持つ絹傘の上に神雨ふるも(再巻)

「日本」新聞四千號祝に寄祝といふ題を得て

日刊新聞書く硯の石の中窪に眞窪になりて四千號に滿つ
黒金の眞金の硯窪むとも日ぶみ「日本」は盡くる時あらし
くろ金を硯につくり椽なす筆の太筆染めてし書かん
大き硯小き硯をうちならべ日ぶみ書く人疾書き徐書く
百千文日にけに書くと汲みかふる硯の海に塵も浮かなくに
百足らず八十の硯の海原に常波立ちて日ぶみは絶えず
墨の舟筆の眞楫をしぐぬきて硯の海の干るまで漕ぐも
百八十の硯の海に水たゝへ世の風潮に舟漕ぎ出づも

明治三十三年十一月三日の佳辰に遇ひてよめる歌

かけまくもあやにかしこき、わご大君今のみかどの、あれましの其日を今日
と、青山のならしの庭に、いくさ君いくさとのへ、角の音をい吹きならせ
ば、抜き放つ八千のつるぎは、稻妻の草に散ること、いさみ立つ駒の足搔は、
久方の雲居空をかけるを行く、(千萬の國のものゝふ、かりがねの列もみだれすい) 假
御座いづの御前に、かち人は銃さゝげ持ち、駒人はひづめ立てなめ、砲を引
くつゝ人共に、かしこみてよごと申せば、天の下の青人草も、よろづ代と三
たび呼ぶかも、から山の草木なびかひ、高麗の海のいろくづ來より、食國の
國の貢と、とことにはにつかへまつらん、君が代のいくさ見の式、見ればゆゝ
しも

大君は神にしませばからの山高麗の海びももろしきいませ

菊

朝ながめ夕ながめして我庭の菊の花咲く待てば久しも
年々にながめことなる我庭の今年の秋は菊多かりき
ガラス戸の外に咲きたる菊の花雨に風にも我見つるかも
我庭の松の木陰に菊咲けば昔の人し思ほゆるかも
我庭にさける黄菊の一枝を折らまくもへど足なへわれは
我心いぶせき時はさ庭への黄菊白菊我をなぐさむ
我うさをなごめて咲ける菊の花繪にし寫して壁にかけてん
冬寒き風松が枝を吹くなべに木陰の菊は色あせにけり
我庭にさかりにさける菊の花折りてかざさん人もあらなくに

秀真へ（十一月十六日）

たらちねの母にわかれて夜泣く子をもるとし聞けば我さへ泣かゆ
振ひ立つ時今來たり妻をなみ君ふるひたつ時今來たり

草廬飲食會々規の末に

來ねば來ず來れば來て食ふ素話に食はずに歸る客はいやく

人の紅葉狩

二荒の山のもみちを白瓶の小瓶にさして臥しながら見る

雪 (旋頭歌)

足^アなやみて室にこもれど寒き此朝北にある毛の國山に雪ふるらしも
若松の木末の雪も見れどあかねと柳なす山吹の枝につめるおもしろ
ガラス戸の外白妙にかがやける雪小夜更けて上野の森のあきらかに見ゆ
いましめの司等門の雪はけといふ雪はけど女力の掃きがてぬかも
常無きは干潟の岩にふる雪のごと汐満つと波の來よらば消えざらめやも
大君のみことかしこみ雪の中の竹百敷の大宮人は歌によむらしも
新玉の年の端^緒白く大雪ふれり八束穂の瑞穂の垂穂田に滿つらんか
すめろぎの日知の國は堅に長きかもとはに雪ふらぬ嶋雪消えぬ山
山^{木々の枝に}の木にこほれる雪を風吹き落す伊達の殿は鹿の皮著て獵に行くらん

霜枯の垣根に赤き木の實は何ぞ雪ふらば雪の兎のまなこにはめな

薔薇の晝に

花ひらをかきのつたなく影をなみ赤の染綿置けるにも似るか

ある人へ

あらたまの年の三年を臥し、我今日起きて坐りぬうそにはあらず

明治三十四年

新年

うつせみの我足痛みつごもりをうまいは寐ずて年明にけり
枕べの寒さはかりに新玉の年ほぎ繩をかけてほぐかも
新玉の年の始と豊酒の屠蘇に酔ひにき病いゆがに
いたつきの長き病は癒えねども年の始と咲ける梅かも
あら玉の年のはじめの七草を籠に植ゑて來し病めるわがため

題小照

あめつちのそきへのきはみわか顔に似るちふものは我かほならし

今泉丈助へ (二月十八日)

みちのくのあたゝら眞綿肌につけ寒きゆふへは君し思ほゆ

長塚節へ (二月)

下總の結城の小田の田雀は友うしなひてさぶしらに啼く

夕餉したゝめ了りて仰向に寝ながら左の方を見れば机の上に藤を活けたるいとよく水をあげて花は今を盛りの有様なり。艶にもうつくしきかなとひとりごちつゝそとろに物語の昔などしぬばるゝにつけてあやしくも歌心なん催されける。斯道には日頃うとくなりまさりたればおぼつかなくも筆を取りて

瓶にさす藤の花ぶさみじかければたゞみの上にとゞかざりけり
瓶にさす藤の花ぶさ一ふさはかさねし書の上に垂れたり
藤なみの花をし見れば奈良のみかど京のみかどの昔こひしも
藤なみの花をし見れば紫の繪の具取り出で寫さんと思ふ
藤なみの花の紫繪にかゝばこき紫にかくべかりけり
瓶にさす藤の花ぶさ花垂れて病の牀に春暮れんとす
去年の春龜戸に藤を見しことを今藤を見て思ひいでつも
くれなゐの牡丹の花にさきだちて藤の紫咲きいでにけり
この藤は早く咲きたり龜井戸の藤咲かまくは十日まり後
八入折の酒にひたせばしをれたる藤なみの花よみがへり咲く

おだやかならぬふしもありがちながら病のひまの筆のすさみは日頃稀なる心やりなりけり。
をかしき春の一夜や

病室のガラス障子より見ゆる處に裏口の木戸あり。木戸の傍、竹垣の内に一むらの山吹あり。此山吹もとは鄰なる女の童の四五年前に一寸許りの苗を持ち來て戯れに植ゑ置きしものなるが今ははや繩もてつがぬる程になりぬ。今年も咲き／＼て既になかば散りたるけしきをながめてうたゝ歌心起りければ原稿紙を手に持ちて

裏口の木戸のかたへの竹垣にたばねられたる山吹の花
小繩もてたばねあげられ諸枝の垂れがてにする山吹の花
水汲みに往來の袖の打ち觸れて散りはじめたる山吹の花
まをとめの猶わらはにて植ゑしよりいく年経たる山吹の花

歌の會開かんと思ふ日も過ぎて散りがたになる山吹の花
我庵をめぐらす垣根隈もおちず咲かせ見まくの山吹の花
あき人も文くばり人も往きちがふ裏戸のわきの山吹の花
春の日の雨しき降ればガラス戸の曇りて見えぬ山吹の花
ガラス戸のくもり拭へばあきらかに寐ながら見ゆる山吹の花
春雨のけならべ降れば葉がくれに黄色乏しき山吹の花

粗笨鹵莽、出たらめ、むちやくちや、いかなる評も謹んで受けん。吾は只歌のやすくと
口に乗りくるがうれしくて。

しひて筆を取りて

佐保神の別れかなしも來ん春にふたゝび逢はんわれならなくに
いちはずの花咲きいで、我目には今年ばかりの春行かんとす
病む我をなぐさめがほに開きたる牡丹の花を見れば悲しも
世の中は常なきものと我愛づる山吹の花散りにけるかも
別れゆく春のかたみと藤波の花の長ふさ繪にかけるかも
夕顔の棚つくらんと思へども秋待ちがてぬ我いのちかも
くれなるの薔薇ふゝみぬ我病いやまさるべき時のしるしに
薩摩下駄足にとりはき杖つきて萩の芽摘みし昔おもほゆ
若松の芽だちの緑長き日を夕かたまけて熱いでにけり
いたつきの癒ゆる日知らにさ庭べに秋草花の種を蒔かしむ

心弱くところ人の見るらめ

岩手の孝子なにかし母を車に載せ自ら引きて二百里の道を東京迄上り東京見物を母にさせけるとなん。事新聞に出でし今の美談となす。

たらちねの母の車をとひかひ千里も行かん岩手の子あはれ
草枕旅行くきはみさへの神のい添ひ守らさん孝子の車
みちのくの岩手の孝子名もなけど名のある人に豈劣らめや
下り行く末の世にしてみちのくに孝の子ありと聞けばともしも
世の中のきたなき道はみちのくの岩手の關を越えすありきや
春雨はいたくなふりそみちのくの孝子の車引きがてぬかも

みちのくの岩手の孝子文に書き歌にもよみてよろづ代までに
世の中は悔いてかへらずたらちねのいのちの内に花も見るべく
うちひさす都の花をたらちねと二人し見ればたぬしきろかも
われひとり見てもたぬしき都への櫻の花を親と二人見つ

五月五日にはかしは餅とて榊の葉に餅を包みて祝ふ事いづこも同じさまなるべし。昔は膳夫をかしはでと言ひ歌にも「旅にしあれば椎の葉に盛る」ともあれば食物を木の葉に盛りし事もありけんを、今の世にいたりて猶五日のかしは餅ばかり其名残をとどめたるぞゆかしき。かしは餅の歌をつくる。

椎の葉にもりにし昔おもほえてかしはのもちひ見ればなつかし
白妙のもちひを包むかしは葉の香をなつかしみくへど飽かぬかも

いにしへゆ今につたへてあやめふく今日のもちひをかしは葉に巻く
うま人もけふのもちひを白かねのうつはに盛らすかしは葉に巻く
ことほぎて贈る五日のかしはもち食ふもくはずも君がまに
かしは葉の若葉の色をなつかしみこたくひけり腹ふくるに
九重の大宮人もかしはもち今日はをすかも賤の男さびて
常にくふかぐのたちばなそれもあれどかしはのもちひ今日はゆかしも
みどり子のおひすゑいはふかしは餅われもくひけり病癒ゆがに
色深き葉廣がしはの葉を廣みもちひぞつゝむいにしへゆ今に

今になりて思ひ得たる事あり、これ迄余が横臥せるに拘らず割合に多くの食物を消化し得

たるは咀嚼の力與つて多きに居りし事を。噛みたるが上にも噛み、和らげたるが上にも和らげ、粥の米さへ噛み得らるゝだけは噛みしが如き、あながち偶然の癖にはあらざりき。斯く噛みくたるためにや咀嚼に最必要なる第一の臼齒左右共にやうく傷はれて此頃は痛み強く少しにても上下の齒をあはす事出来難くなりぬ。かくなりては極めて柔かなるものも噛まずに吞み込まざるべからず、噛まずに吞み込めば美味を感せざるのみならず、腸胃直に痛みて痙攣を起す。是に於て衛生上の營養と快心の娛樂と一時に奪ひ去られ、衰弱頓に加はり晝夜悶々、忽ち例の問題は起る。「人間は何が故に生きて居らざるべからざるか」

さへづるやから白なす、奥の齒は蟲ばみけらし、はたつ物魚をもくはえず、木の實をば噛みても痛む、武蔵野の甘菜辛菜を、粥汁にませても煮ねば、いや日に我つく息の、ほそり行くかも

下總の結城の里ゆ送り來し春の鶉をくはん齒もがも

菅の根の永き一日を飯も食はず知る人も來すくらしかねつも

根岸に移りてこのかた、殊に病の牀にうち臥してこのかた、年々春の暮より夏にかけてほととぎすといふ者の聲しばし聞きたり。然るに今年はいかにしけん夏も立ちけるにまだおとづれず。剝製のほととぎすに向ひて我思ふところを述ぶ。此剝製の鳥といふは何がしの君が自ら鷹狩に行きて鷹に取らせたるを我ために斯く製して贈られたるものぞ。

龍岡に家居る人はほととぎす聞きつといふに我は聞かぬに

ほととぎす今年は聞かすけだしくも窓のガラスの隔てつるかも

逆剝に剝ぎてつくれるほととぎす生けるが如し一聲もがも

うつ抜きに抜きてつくれるほととぎす見ればいつくし聲は鳴かぬど

ほととぎすつくれる鳥は目に飽けどまことの聲は耳に飽かぬかも

置物とつくれる鳥は此里に昔鳴きけんほととぎすかも

ほととぎす聲も聞かぬは來馴れたる上野の松につかすなりけん
我病みていの寐らえぬにほととぎす鳴きて過ぎぬか聲遠くとも
ガラス戸におし照る月の清き夜は待たずしもあらず山ほととぎす
ほととぎす鳴くべき月はいたつきのまさるともへば苦しかりけり
歌は得るに従ひて書く、順序なし

左千夫へ（五月十三日）

いとし子のまな子のつゝみひまあらば牡丹見に來と文書きおくる
今日明日に君來まさすば我庭の牡丹の花散過んかも
去年君がたびし牡丹も今日已につばみやぶれて紅の見ゆ

足引の山のつとひに君來すば半てふ影のうしやさひしや
藤の歌山吹のうた歌又歌歌よみ人に我なりにけり

牡丹

くれなるの牡丹の花におほひたるやふれ小傘に雨のしきふる
雨のふる牡丹の花に傘すれば妬み顔なる垣の山吹
出羽に行きし吾旅傘の柄はぬけて今か牡丹の雨ふせき傘
夕くれのくもりかしくみあらかしめ牡丹の花に傘立つる人
さかりなる牡丹の花におほはまく雨のふる傘とりいて見つ
雨ふると牡丹の上に蔽ひたる小傘かくれに赤き花見ゆ

春雨の牡丹におほふ傘を低み一つの花は隠れて見えす
雨そぐ庭のかたへに傘さして立てる牡丹は美人の如し
賤か家の貧しき庭に濡れて立つ雨の牡丹よ傘まゐらせん
二つ咲く牡丹の花におほひたるかはほり傘のふちの雨だれ
ガラス戸の外面に咲けるくれなるの牡丹の花に蝶の飛ぶ見ゆ

○
我庭の三本松、伐りなば家主怒らん、伐らずば縁はびこり、上つ枝は日影さ
へぎり、下つ枝は露しづく垂れ、うつくしき花もそだたず、はしきやしうま
木も枯れぬ、我庭の三もと松、上つ枝も下つ枝も伐れ、家主怒るとも
さ庭へにはびこる松の枝伐らば家主怒らんさもあらばあれ

下蔭の草花惜み日を蔽ふ松が枝伐らん家主怒るとも

我庭の三もと松伐りあはれ深き千草の花に日の照るを見ん

○

夕顔の實の太けくに墨黒に目鼻をかゝば人とならんかも

喜節見訪

下ふさのたかし來れりこれの子は蜂屋大柿吾にくれし子

下總のたかしはよき子これの子は蟲喰栗をあれにくれし子

春ごとにたらの木の芽をおくりくる結城のたかし吾は忘れず

明治三十五年

御題新年梅

大君のみことかしこみあら玉のとしのはじめに梅の花さく

新玉の年のはじめに咲く梅は君か御歌の題にしあるへし

みうたよみよみたまはくの梅の花雪霜しぬぎ年のはにさく

あら玉の年をことほぎうめの花一枝買ひていけにけるかも

わか庭にさく梅の花雪なから折りてかさゝん人もあらなくに

あら玉の年のはじめは寒けれと梅をし見ればたぬしかりけり

にひ年の題たまはりぬ我庵のわか木の梅はなど咲かぬかも
うめの花乏しく咲ける璞のとしのはじめは嬉しくありけり
年のはの北風さむみくれなるの梅のつばみのちひさきろかも

○

かみふさの山の杉きりみやこべの茅場の町に茶室つくはも

紅梅の下に土筆など植ゑたる盆栽一つ左千夫の贈り來しをながめて朝な夕なに作れりし歌
の中に

くれなるの梅ちるなへに故郷につくしつみにし春し思ほゆ

わか病める枕邊近く咲く梅に驚なかばうれしけんかも
つくし子はうまなれやくれなるに染めたる梅を絹傘にせる
梅の花散らはをしけん朝な夕な枕へ去らず目な乏しめそ
家の内に風は吹かねどことわりに争ひかねて梅の散るかも
鉢植の梅はいやしもしかれども病の床に見らく飽かなく
紅のこそめと見えし梅の花さきの盛りは色薄かりけり
ふゝめりし梅咲にけりさけれども紅の色薄くしなりけり
春されば梅の花咲く日にうとき我枕への梅も花咲く
枕へに友なき時は鉢植の梅に向ひて歌考ひと伏し居り
梅の花見るにし飽かず病めりとも手震はずは畫にかゝましを

京の人より香堇の一束を贈り來しけるを

玉つさの君の使は紫の堇の花を持ちて來しかも
君か手につみし堇の百堇花紫の一たはねはや
やみてあれば庭さへ見ぬを花堇我手にとりて見らくうれしも
うち日さす都の君の送り來し堇の花はしをれてつきぬ
玉透のガラスうつはの水清み香ひ堇の花よみかへる
わがやどの堇の花も香はあれど君が堇の花に及ばぬ
土かひし君が堇は色に香に野への堇に立まさりけり
一たびもいまた見なくにわがためにすみれの花をつみし君かも

なぐさもるすべもあれとか花堇色あせたれどすてまくをしも
小包を開きて見れば花堇その香にほひてしをれてもあらず
言さへぐとつ國種の花堇其香を清み嗅けどあかぬかも
まを鏡直目に見ねど花堇つみておくりし人し戀しも

つくしほど食ふてうまきはなくつくしとりほどして面白きはなし、碧梧桐赤羽根村に遊び
てつくしを得て歸る再び行かんといふに思ひやり興じてよめる

赤羽根のつゝみに生ふるつくづくしのびにけらしも摘む人なしに
赤羽根の茅草の中につくづくし老いほうけゝりはむ人なしに
赤羽根に摘み残したるつくづくし再び往かん老い朽ちぬまに

日のくれてイ
きてつみて來にけりイ(人つまのまにイ)

赤羽根のつゝみにみつるつくつくし我妹と二人摘めど盡きなくなにかも
つくつくしひたとイに生ひける赤羽根にいざ往君も往きて摘けイめ道しるべせな
赤羽根の汽車行く道のつくつくし又來ん年も往きて摘まなん
うちなげき物なおもひそ赤羽根の汽車行く路につくつくしつめ
瘦せし身を肥えんすべもか赤羽根に生ふるつくつくしつむにしあるべし
つくつくし摘みて歸りぬ煮てや食はんひしほと酢とにひでてや食はん
つくつくし長き短き何イそれもかも老いし老いざる何もかもうまさ
つくつくし又つみに來ん赤羽根の汽車行く路と人に知らゆな
つくつくし故郷の野に摘みし事を思ひいでけり異國にして
女らの割籠たづさへつくつくし摘みにと出る春したのしも

みつから病中の像をつくねて

わが心世にしのことらばあら金のこの土くれのほとりにかあらん

近江日野なる鈴木ふさ子より寒晒粉を贈りこしければ

近江のやいぶきおろしにさらしたる米の粉たびし君し戀しも

晝讀の歌 (病牀苦語)

赤椿黄色山吹紫にむれて咲けるはタテくの花
桐の舎が妻を迎へし三年前かきて贈りしをだまきの花

上つふさ睦岡村に生れたる「わらび」が知らぬげんくの花
珍しき草花もがと茶博士の左千夫がくれしチンノレヤの花

煮鬼憶諸友

下總のたかしがもとゆ、贈り來しにこ毛兔を、厨刀音かつくと、牛かひの
左千夫がほふり、ふた股の太けき煮て、桐の舎もあきみつもをす、あなうま
そびらの肉の、炙れるをむさほるは吾ぞ、残れるをほづまもがも、家遠み呼
ばふすべなみ、もみち葉の赤木も岡も、あはれ幸なし

おくられものくさく

一、史料大觀(台記、摺記、扶桑名畫傳)

このふみをあまし人、このふみをよめとたばりぬ、そをよむとふみあけみれ
ば、もじのへになみだしながる、なさけしぬびて

一、やまべ(川魚)やまと字は節より

しもふさのゆふきごほりの、きぬ川のやまべのいをは、はしきやし見てもよき
いを、やきてにてうまらにをせと、あたらしもかれの心を、おくりくるみちに
あざれぬ、そをやきてうまらにくひぬ、うじははへども
そらみつやまとのいもは鳶のねのころゝにすなるつくいもなるらし

一、やまめ(川魚)三尾は甲州の一五坊より

なまよみのかひのやまめは、ぬばたまの夜ぶりのあみに、三つ入りぬその三つ
みなを、わいあにおくりこし

一、假面二つ某より

わざをぎのにぬりのおもて、ひよとこのまがぐちおもて、世の中のおもなき人
に、かさんこのおもて

一、草花の盆栽一つは蓋より

秋くさの七くさ八くさ、ひとはちに集めてうゑぬ、きちかうはまづさきいでつ、
をみなへしいまだ

一、松嶋のつとくさんくは左千夫藤眞より

まつしまのをしまのうらに、うちよする波のしらたま、そのたまをふくろにい

れて、かへりこし歌のきみふたり

早の歌 二首

天なるや早雲湧き、あらがねの土裂け木枯る、青人草鼓打ちノ、空ながめ虹も
が立つと、待つ久に雨こそ降らめ、しかれども待てるひじりは、世に出でぬかも

早して木はしをるれ、待つ久に雨こそ降れ、我が思ふおほき聖、世に出でゝわを
し救はず、雨は降れども

本所の左夫氏宅に水溢れて今日のみとりの番に往き難しとて折ふし同家を訪ひあはせたる
上總の藤眞氏が左千夫氏に代りて病床を訪はれけるに山林の話などつばらに聞きて後よめ
る

市に住めば水の患あり山を買へば火のうれひあり火の患君は

戯れに左千夫氏におくる (牛舎改築後洪水あり)

おほやけのみことかしこみ牛の爲に建てし小屋はもけふの水の爲

嘲諸兄歌

明治三十五年七月二十三日同人四五草庵に會して茶のみあへしける時戯れに作る

樂焼のするものやかば弓矢取る左千夫の朝臣か面かたを取れ
強飯をもちたのすくね小宿禰か酔ひ泣するを聞けはいたしも
猿飴の岡のむらじはえどつこのかつを大臣のみやつこにして

陸岡のわらびおとゞは水たまる池田のあそのみ末なるべし
香具山に鏡鑄し時の金くそはほつまの神となりそこねけん

左千夫君松嶋よりの歸りに

小ふくろの中は我知る茶の碗と筆と硯と松しまの歌
みちのくの千賀の鹽がま跡はあれど玉藻をかつく海人もなかりき

九月三日椀もりの歌 戲寄郡翁

麩の海に汐みちくれば茗荷子の葉末をこゆる眞玉白魚

曇き苦しき氣のふさぎたる一日もやうやく暮れて、鄰の普請にかしましき大工左官の聲もいつしかに聞えず、茄子の漬物に舌を打ち鳴らしたる夕餉の膳おしやりあへの程に、向嶋より一鉢の草花持ち來ぬ。緑の廣葉うち並びし間より七八寸もあるべき眞白の花ふとらかに咲き出で、物いはまほしうゆらめきたる涼しさいはんかたなし。蔓に紙ぎれを結びて夜會草と書いつけしは口をしき花の名なめりと見るに其傍に細き字して一名夕顔とぞしるしける。彼方の床の間の鴨居には天津の肋骨が萬年傘に代へてところの紳董どもより贈られたりといふ樺色の旗二流おくり來しを掛け垂したる、其のもとにくだりの鉢植置き直してながむれば又異なる花の趣なり。此帛に此花ぬひたらばと思はる

くれなるの旗うごかして、夕風の吹き入るなへに、白きものゆらゆらゆらぐ、立つは誰ゆらぐは何ぞ、かぐはしみ人か花かも、花の夕顔

年代不明

大ぶつのみくしのうへに日はおちてあきかせさむしかまくらの里
年をへて茂れる松の下草のとくさ動かし朝の風吹く

友何かしの肖像に題す

見す久に戀しけん時さし向ひことゝはましを土くれにして

晴覽先生三十年遠會

たち花のかくのこのみを取そへてきみのたむけに歌たてまつる

新体詩

鹿 笛

近者關更集を讀む。中に

鹿笛に谷川渡る音せばし

といふ句あり。巻を捲ふて嘆じて曰く、嗚呼僅々十七字、何ぞ其餘音の觸々たる。乃ち之を布衍して長歌一篇を作る。世人幸に蛇足を笑ふなかれ。

一

藁頭巾、種が嶋、
火繩片手に　うちふりつゝ、
宵間に、紛れ　立ち出でたり。
小道盡きたる　八重葎、
うばらかきわけ　茅踏みつけ、

山又山 深く入る。
左にまはる 岨陰の、
かなたにもものゝ音聞ゆ。
怪しこゝに 何物ぞ。
暗き中より 透かし見つゝ、
一足うしろに 身を構へ、
銃取り直す 折も遅し、
鹿は木の間に 隠れ去りぬ、
森闇く星 見えぬところ。
惜しき事したり、さりながら
ゆうべはしなく 知り得たる、
道筋こそは たのみなれ。
阪を上り 阪を下り、
溪にはなれ 溪に沿ふ、

行けどもく 目じるしの、
見えざるは道や 迷ひけん。
忽ち起る 風の音、
萩動搖 葛撩亂、
月代上る 山の端に、
兀と一本 杉高し。
こゝなりく この峰なり。
このむら薄に 隠れ居て、
彼等の來るを 待つべしや。

二

腹ごもりの 鹿の子の、
其皮もて つくりし笛、
其笛頻りに 吹き立てぬ。

月隠れ雲　いそがしく、
風はらくくと　尾花吹く。
あはれを盡す　其聲に、
われさへ膚　寒けれど、
より來る鹿も　なかりけり。
時こそ早けれ、子も過ぎじ、
しばらくひそむ　衣手に、
露の玉散る　夜は更けて、
風のまに　尾の上より、
かすかに妻戀ふ　聲すなり。
次第に近く　聞ゆるは、
向ふの谷を　下るらん。
鹿笛口に　押しあて、
ひいと吹きぬ。やゝあつて

又ひいと吹きぬ。吹きさして、
静まり居れば、ざばくと、
谷川渡る　音せはし。
心を入れて　吹く笛に、
戀の關路の　あやなくも、
呼びかはしつゝ、忽然と、
男鹿あらはれぬ、岩の上に。
月に振り向く　角のさき、
妹を尋ぬる　聲の牙え、
それをしるべに　ねらひよりて、
切つて放てば　雷轟々、
山震ひ木魂　すさまじや。
やゝものすこく　なる空の、
月をたよりに　歸り行く、

獵男の肩に 鹿一つ。

三

萩の花散る 草むしろ、
月にあかせし むつ言も、
小笹が原の 露の床、
雨に忍びし かね言も、
松の緑の もみぢして、
山、海となる ときもあれ、
かたみに心 かはらじと、
契りしことも、 なかくに
思ひます穂の 絲薄
亂れくるしき 此頃よ。
語り残し、 先の夜の、

うらみもこよひ いは橋の、
覺束なくも 踏みわたる、
行くてに見えし 人の影、
ものおそろしさに 逃げのびて、
あらぬところを さまよふ程、
天地をひどかす ものゝ音、
胸さわぎする 夜なるかな。
やがてぞ變る 空合の、
黒雲走り 風吹き荒れ、
大木を抜き 石を飛ばす。
しゝむらふるひ 肝つぶれ、
心も 心 ならねども、
時おくれなば 我俵こそ、
空しく待ちわび たまふらめ。

聞の嵐の 路をなみ、
思はぬ谷に 踏み落ちつ、
かつらに足を すくはれつ、
せきにせきてぞ かけ上る、
第三の峰の 岩端に、
佇みてこそ 居たりけれ。
我佚やいづこ 聲やする、と
耳そばだて、 聞くとすれど、
東の山に 聲もせず、
南の峰に 聲もせず、
嵐ごう／＼ 水くわく／＼
呼べども 答はなかりけり、
待てども たよりは なかりけり。
同じところに 次の夜も、

又次の夜も泣き あかす、
霜おきまさる 夜毎々々、
月は薄に 上れども、
それとおぼしき 影もなし。

(明治二十九年八月五日)

父の墓

一

父の御墓に 詣でんと
末廣町に 来て見れば
鐵軌寺内を よこぎりて
墓場に近く 汽車走る。
石塔倒れ 花萎む
露の細道 奥深く、
小笹まじりの 草の中に
荒れて御墓ぞ 立ちたまふ。

見れば圍ひの 垣破れて
一步の外は 鳥なり。
石鐵瓦 来るなべに
粟穂御墓に 觸れんとす。
胸つぶれつゝ、 見るからに、
あわてゝ草を むしり取る
わが手の上に 頬の上に
飢ゑたる蚊 群れて刺す。

二

櫛を手向け 水を手向け
合掌してぞ かしこまる。
涙こぼれぬ、 父上と
我を隔つる 其土に。

いとけなき時 婆々君に
此御墓前にて 習ひつる
念佛一遍 その如く
しづかに唱へ 終りたり。
人につれられ 詣來にし
昔覚えて、墓の木に
二十四年の 秋の風、
木末動かす 音悲し。
旅に住む身は 年々の
祭も心の まゝならず。
父上許し たまひてよ。
われは不孝の 子なりけり。

三

勉め勵みて 家を興し
亡き御名をも あらはさんと、
わが讀む書の あげくれに
思ひしことも あだなりき。
出づるに車、食に魚、
残りたまひし 母上を
せめて慰め まつらんと、
思ひしそれさへ あだなりき。
學問いまだ 成らざるに
病魔はげしく 我を攻む。
書を抛ち 門を閉ぢ、
一年半ばは 褥に臥す。
何事も過去に 成らざりき。
未來も成ること なかるべし。

やがて吾妻に 上りなば
また得まみえ たてまつらじ。

四

わが去る後は、草むらの
人より高く 生ひ茂り
御墓隠さん。さりながら
そを除く人も なかるべし。
わが去る後は、彫りつけし
法の御名の 讀めぬ迄に
苔や蒸すらん。さりながら
そを掃ふ人も なかるべし。
わが去る後は、夜を寒み
栗の鳥の 月に鳴く

蟲より外に、露わけて
弔ふ人も なかるべし。
また得詣でじ。今生の
御いとまごひ 申すなり。
父上許し たまひてよ。
われは不孝の子なりけり。

(明治二十九年八月二十日)

小 蟲

胡 蝶

一もと董 物思ふ
ゆふべ胡蝶の 舞ひ落ちぬ
しきりに蝶は さゝやきつ、
嬉しげに花は うなづきつ。
假の契りに 紫の
露やこぼして 別れけん。
再び蝶は 歸り來ず、
董は終に 萎みけり。

虻

風無き罌粟の 花ざかり。
虻の羽觸れに うつくしき
一ひら散れば、 三ひら四ひら
皆さそはれて こぼれけり。
赤きが散りぬ。 そを見てか
白きも散りぬ。 虻は猶
花や残るとうたてくも
青き坊主に羽を鳴らす。

蜻 蛉

ほがらかに照る 秋の日に
赤き衣を 輝かせ

蜻蛉群れ飛ぶ。其下に
晴れて筑波の山低し。
頭を西につらねつゝ
共につい行き つい戻る
穂なみ揃へし 田の上に
其影落ちて いそがはし。

蜂

冬の日受くる 緑の先、
老嫗と共に 背を曝す
小猫の耳を、蜂一つ
錆びたる針もて 刺さんとす。
チヨマものうげに 手を舉げて
ちよいと拂へば、飛び上り

檐の掛菜を めぐりつゝ
何尋ぬるか 小半日。

(明治二十九年九月五日)

戈

來れ君たち。われくは
敵の重圍の中在り。
味方はわづか 十餘人
たとひ鬼神の 勇ありとも
逃れ出づべき やうあらじ。
さもあらばあれ ものゝふの
敵に捕はれ おめくと
恥を異國に さらすべき。

われ等を尋ね 敵軍の

來るをこゝに 待ち伏せし、
身もて逼りて、日頃夜頃
鳴りに鳴りたる 寶刀の
やいばの牙えを 試みん。
やがて彼等の 寄する迄
この森陰に 隠れ居て
静かになごりを 語るべし。

家の闕を 出づるより
君にさゝげし 命なり。
生きて再び 歸らじ。と
別れを惜む わが妻に
誓ひしことも 今さらに
思ひ出されぬ。いさぎよき

最期を遂げて 名を揚げん。
ひけを取るな。人々よ。

寄せたり。寄せたり。敵そこに。

覺悟は善きか。いざ進め。

日本刀の 斬れ味を

見するはこゝぞ。退くな。

斬れ。斬れ。左を 斬り拂へ。

斬れ。斬れ。右を 斬り拂へ。

近よる程は 近よりて

斬らるゝ迄は 敵を斬れ。

あはれ弱卒 さんざんに

伐り立てられて 引きしかど

新手寄せなば いかにして

手負のわれら 防ぐべき。

來れ君たち。いざこゝに

竝んで腹を屠るべし。

神州男兒 萬々歳。

神州男兒 萬々歳。

筆

さらばよ、少女。此日頃
世にわりなくも 馴れし身の
今は最期の 別れなる。
なごりは更に 盡きせねど
別れじかなふ ことならず。
さらばよ、をとめ。心よく
わが取る筆の ほこさきに
墨の雫と 消えよかし。

かねて拙き 小説の

御身を描き 初めしより
ちびたる筆に 花咲きて、
われながら わが面白く、
日赫赫たる 暑さには
したゝる汗を 墨に磨り、
寒凜凜たる 冬の夜は
硯の氷を うち砕く。

圓滿なる人 只一人
うき世の中に 求めかね、
無垢清浄の 御身をば
しばらくかりに 設けつゝ
神聖にして 濁りなき
情をこゝに 寄せたれど

御身もとより 若くして
死すべき運を持てりしなり。

まことを言はば、初めより
殺さんために 御身をば、
まうけしものぞ。しかはあれど
此期に及び なまなかに
けだかき生れ うるはしき
姿に心 引かされつ、
手はなえたるが 如くにて
少しも筆は はたらかず。

いかになごりを 惜むとも
別れでかなふ ことならず

わが萬斛の 血の涙
犠牲となりて 身をたふす
御身のために 瀧ぐべし。
さらばよ、少女。他日われ
文學者の名を 残しなば
そは皆御身の いさをなり。

(明治二十九年九月五日)

四季

春

かすみながらに 空晴れて
緑萌え立つ 山の端に、
薄紅の 衣軽く
長き裳を いとゆふと
亂して空に 靡かせつ、
吹かば消えなん 御姿の
くはし女神ぞ 立ちたまふ。

裾野をたどる 少年の
堇げんく 摘みませて
行く行く造る 花たばを
ひとりうち見て 「これをしも
誰に贈らん。 さりとては
誰に贈らん。 贈るべき
人なかりき」と 投げ捨てつ。

女神扇を ふりあげて
こゝへとばかり いざなへば、
くしき力に 人間の
恨もうさも うち忘れ、
風に吹かれて 道もなき
山の麓の 芝生迄

歩むともなく 歩み來ぬ。

おびただしくも 蝶群れて
飛ぶと見し間に、少年は
酒に酔ひたる こゝちして
そこなる草を かり枕
すや／＼とこそ 眠りけれ。
女神静かに 下り立ちて
袖をそびらに うちかけつ。

「いとし我君 許したまへ。
君をここ迄 招きしも
君を夢路に さそひしも
皆妾なり。はや月の

升りしに目ざめ 給はずや。
君が捨てにし 花たばは
かけて妾の 胸に在り」

夏

白き袋に 腰をかけ、
赤き袋を 引きよせて、
口を開けば 炎々と
ほのほは空に 迷る。
それを四方へ あふぎつゝ
ほゝ笑む顔を 日に向けて、
あやし男神や 雲の上。

都はなれし 野のほとり、

車もよらぬ 夕顔の
籠くづれて 芽ぶきの
家の奥まで あらはなり。
今寐入りたる 子の口に
啣む乳房を そとはなし
「今日や暑さの 峠なる」

竈の下を 吹きつけて
煮え立つ 鍋の蓋取れば
粟の飯か 雑炊か
ふつ／＼として 湯氣上る。
「夫は遅し。子は如何に」
待てば日暮るゝ 門口に
佇み居れば 鈴の音。

馬牽く夫 東より、
徳利提げし子 南より、
歸り來りぬ、もろともに。
「いざ風呂にめせ。荷卸して
すそして妾 かひやらん。
酒ひやゝかに 飯あつし。
くつろぎたまへ、蚊遣して」

白き袋の 紐解けば
二布ばかりの 裸身に
涼しき風の 颯と吹く。
湯あみしはてし 妻は今
櫛笥取り出で 端居して

我子に向ひ「極樂と
人の歌ふは我が上ぞ」

秋

たけなる黒髪 肩にかけ
皆釣り上げ 肩ちぢめ、
凄き女神の 只一人、
絶壁の上の 岩角に
足も危く 寄り居つゝ、
きつと睨めば 人間の
桐の一片ぞ 落ちにける。
西の小窓に もたれたる
人は假寐の 夢覺めて

物に驚く 風情あり。
きのふに變る 夕風の
膚に入みて やゝ寒み
蹶然として 身を起し
仰げばいよゝ 秋高し。

「丈夫天下の 志
今にして若し 成らざれば
いつをか待たん。 思ひ見れば
長くも我は 眠りしよ。
我が心はや 決したり。
泣くとも止らじ、 さな泣きそ。
しばしの別離 何かあらん」

女神が白き裳に袖に
はひ上りつゝ、岩ながら
八重に纏ひし 蔦かつら
細きもろ手に たぐりよせ、
血の息ほつと 生臭く
吹くよと見れば、上葉下葉
もみぢせぬ葉も なかりけり。

雞を裂き 酒を盛る
別れのむしろ にぎはしく
劔を取つて 舞ひ出でぬ。
「時は野山の 秋たけて
見渡す限り 錦なり。
行けよ、ますらを。世の中の

功名汝を 待つ久し」

冬

男神嵐に 鞭うちて
木末々々を 蹴散らせば、
楓柞の くれなるも
銀杏も 蔦も 雑木も
一葉残らず 落ちはてし、
夕日にさはる 影もなく
時雨にうつる 色もなし。
髪ほうくと 振り亂し
身にはあでなる 衣を著て、
残る錦の 一枝を

手にかざしつゝ、狂ひ行く。
少女ははたと立ちどまり
今しも散りし もみぢ葉を
うらめしげにぞ拾ひける。

一足行けば 又一葉
枝をこぼれぬ。そを拾ひ
一足行けば 又一葉
二葉三葉四葉 こぼれけり。
散るをば拾ひ、拾ふをば
うち重ね居れば 又散りて
手なる小枝に ものもなし。

「あら腹ただし うらめし」と

拾ひ集めし もみぢ葉を
虚空に蒔けば はら／＼と
石の面に 散りしきぬ。
しばらくそれを 見つめ居つ、
身を横へて 其上に
心よげにぞ 伏しにける。

風の音をも 忍びつゝ、
静かによりて 恐るゝ
男神をとめを 抱き起し
つめたき唇 青き頬に
心をこめて 接吻す。
やがてぞ男神 立ち去れば
少女はがばと 倒れけり。

(明治二十九年九月二十日)

音頭の瀬戸

宇品の港船出して
四國に渡る通ひ路の
吳、江田嶋と打ち過ぎて、
波も静かに風もなく
音頭の瀬戸にかゝりけり。

兩岸逼りて海狭く、
崖高うして松疎なり。
響灘より押し來る
潮の流れ急にして

少しも船は進み得ず。

昔入道相國の
入日を返すいきほひは、
山をつんざき嶋を斷ち
人の力に此瀬戸を
忽ちにして切り開く。

切つて落せば安藝の海
伊豫の海へと續きつつ、
難波に上り西國に
下る小船も大船も
ここを過ぎぬはなかりけり。

平家が榮華極めたる
六十年の夢覺めて
子孫も繼がすなりぬれど、
世に残したる功業は
恩澤今に及ぶなり。

石垣築く海の中
一もと松の下蔭に
五輪の塔の聳えたる、
昔思ひて清盛を
ところの海人や祀るらん。

頃は八月末つ方
雲の走りのやや早く

空あひけはしと見る程に、
あらて俄に吹き起り
大波、船を揺りに揺る。

さてこそ北の吹き來れ、
夜に入る程につのらん、と
船人下へ馳せ行けば、
乗合肩をひそめつつ
おのが部屋にぞ入りにける。

ゆられながらも甲板の
手すりに倚りて眺むれば、
はや暮れかゝる嶋、蔭の
暗き處にあら波を

踏まへて物の影黒し。

法衣をまとひ珠數を取り、
赤き面に白かねの
聲さかだちて恐ろしく、
たけ一丈もありぬべき
大入道ぞ立てりける。

つぶらなる眼をうち開き
くわつと睨みし一面の
海いやましに荒れ出でて、
左右になびく船一葉、
帆柱、波を打たんとす。

潮は早し、風あらし。
あらん限りの速力に
黒き煙のうづまけど、
あやかしつきししるしにや
流さるるなり、ともすれば。

今は得塔へず室に入り
行李枕にうつぶしぬ。
波、甲板を洗ふ音、
嵐、帆網を鳴らす音、
耳にひびきて眠られず。

又もやかぶる横波に
船八分に傾けば、

鐵瓶、水をくつがへし、
荷物崩れつ、其中に
念佛唱ふる聲すなり。

さすが男の意地強く
色に見せねど、上臈の
泣き感ひつつ、今日を世の
限りと啣つさま見れば
心細さのまさるなる。

すはや揺り上げ揺り下す
船もろともに、今ははや
沈みはてんと覺えたり。
斯くなる上は運命を

天に任する外あらし。

心を静め眼を塞ぎ
時の移るを待つ程に、
やがて難所ものりきりて、
一船の人恙なく
三津の濱にぞ著きにける。

(明治二十九年十月五日)

園の秋

萩薄

小庭に生ふる萩薄、
いまだ二葉のはじめより
行末かけて契りしか
やがて穂に出で花咲きぬ。
萩の小雨のふるごとに
あはれ薄はもたれ伏す、
薄の風のくるたびに
したたか萩ぞこぼれける。

萩は骨に薄白髪にならんとす

鶏頭

朝顔開くあしたには
菜賣豆賣先づ到る。
おしろいの咲く夕には
豆腐屋の聲かすかなり。
ある日野分の吹きしより
草倒れ花おとろへて、
ひとり残りし鶏頭の
朝も夕も只赤し。

庭十歩秋風吹かぬくまもなし

蟬 蛸

秋風吹けばきのふ迄
かしましかりし蟬どもの
いづち行きけん。鯛の
音さへ聞えずなりにけり。
淵明集を讀みさして
障子開けば、椎高み
夕陽のこる木の末に
つくつくぼうし聲長し。
灯ともして秋の夕を淋しがる

蟲 聲

茄子の雫、瓜の汁
聲細り行くあはれさに、
籠を開きて、きりぎりす

松蟲鈴蟲皆放つ。
荒れにし園は露深し
月あきらかに風清き
ゆふべゆふべを端居して
汝が鳴くやとわれ待たん。
萩が根も薄の中も蟲の聲

白 菊

雪洞とりて縁側の
夜寒に立てば、末枯れて
何もなき庭の片隅に
白菊白く灯にうつる。
籬の外はうばたまの
關より暗き上野山。

杉の木立に星落ちて
隠隠とひびく鐘の聲。

しづかさや月代上る森の上

(明治二十九年十月五日)

金州雜詩

(明治二十八年
金州滯在所觀)

金州城

わがすめらぎの春四月、
金州城に来て見れば、
いくさのあとの家荒れて、
杏の花ぞさかりなる。

三崎山

通譯官とそのはじめ
誰があなどりし。國のため

君等が捨てし命こそ
誠に忠義の鑑なれ。
一たびここに謁で来て
君が意中を思ひやれば、
そぞろに胸のせまりつつ、
目ぶたに涙たたふなり。
さもあれ、われら丈夫は
死すべき時に死するをば
譽れとすなり。なかなか
羨しさよ、其最期。
君等御魂を安んせよ。
金州城はたちまちに
わが手に落ちぬ。これも亦
君等がたてしいさをなり。

況してかしこき恩命の
君等の上に下りつつ、
名を残したる三崎山
とこしなへに立つ墓三基。

觸 體

三崎の山を打ち越えて
いくさの跡をとめくれば、
此處も彼處も紫に
蘆咲く野のされかうべ。

空 村

鶉さわぐ枯木立、
夕日の光ひややかに

山にかたよる一村の
寂寞として人もなし。

空 屋

半ば崩れし道の邊の
家の檐端にうるはしく
咲ける杏を目じるしに
歸り來にけん、つばくらめ、
去年の古巢を尋ねつつ
家内覗けばこはいかに、
竈つめたく風寒く
主も兒も影を見ず。

若 菜

金州の郭の外に
若菜摘むうなゐをとめ。
汝が家はいづくの程ぞ、
汝が年はいくつになれる。
摘み摘みて筐にあまる
その若菜何にか摘める。
汝が母にすすむる料か、
町に出でて代にかふるか。
代ほしくばかへてとらせん。
日暮るるに母こそ待ため。
とく歸れ、家路をさして。
あはれこの子、國亡びしと
なれば知らずよ。

胡弓

金州城の門の外、

立ち踵ぶ木も年古りて
たふとく見ゆる御社に
詣でて見れば、きのふ迄
神とあがめし御像も
打ち碎かれて、其あとに
藁火もやしつ、一むれの
我が軍夫こそつとひたれ。

「國を出でしは去年の程
菊つばみたる程なりき。
母は別れを惜みつつ、

歸り來らん日をいつと
問ひ返されて、今さらに
慰めかねつ「それよそれよ、
隅田の櫻咲く頃に
土産荷ふて歸るべし」

誓ひしことは忘れねど
月日はわれにとどまらず。
はや春暮れて此國の
花もさかりと見るからに、
ただなつかしき故郷の
櫻は雪と吹かるらん。
今や歸ると母人は
空しく立てる門の外」

一人が言へば又一人

「われも在所に残し置く

妻こそ子こそいかにして

この一冬を凌ぎけめ。

金はおくれど返事無し。

文かかんには無筆なり。

最早いくさの終りぞと

聞くと嬉しや、昨日今日」

折しも門にかちかちと

鳴らすは誰ぞと出て見れば、

乞食か知らず、門附か

知らず、二人の少年の

胡弓と撃ち木それそれに
うちつかなでつ進み寄り
此方に向ひ辭誼するは
合力を乞ふ心にや。

故郷思ふ此頃は

人のあはれもよそならず。

汝は此地のものならん

いかなれば斯く淺ましき

妻とはなりはてたるぞ。

去年のいくさの其折に、

いとし親にや別れたる、

いとし妻にや別れたる。

梨の木陰に佇みて
彼はたくみにひきいでぬ。
悲しき聲を振り立てて
歌ふを聞けばあはれなり。
少女は知らず亡國の
恨、と彼や歌ふらん。
國は破れて山河在り、
草木春、とや歌ふらん。

あはれを盡す音楽に
神の心も動きけん、
黒雲低く舞ひ落ちて、
まだ此頃を牙え返る
渤海灣の風寒く

一吹き吹けば、ちらちらと、
胡弓取る手の其上に
ふり來る梨の花吹雪。

(明治二十九年十月二十日)

洪水

一

杉深く水清きところ、
二人の神はいであひぬ。
千歳の老木半ば朽ち、
苔厚く蒸す根の上に
腰打ちかけし森の神
「絶えて久しく逢はざりき。
此頃いかにおはすらん。
山に住む身は世に疎く、

開けゆくてふ有様も、
はるかに見ゆる高殿と
麓を過ぐる汽車の音の
外には見聞く事もなし。
大川づたひ君はまた
都に近く往來して
樂しき事ぞ多からん。
もの珍しき世語りに
わがつれづれを慰めよ
落ちくる水の迸る
巖に半ば身を寄せて、
少しほほゑむ川の神
手を打ふりて「さないひそ。
人多く住む都邊に

何面白き事あらん。
汽船は波をひるがへし、
水の面に煤満てり。
思はぬ岸に新しき
小川出来ぬと踏み入れば、
あら恐しや。こゝも亦
流をたのむ工場の
大水車しかけつゝ、
渦巻く中へわれらをば
落し入れんとするものぞ。
こゝまたまそこに遊ぶとも、
煙突の影、鐵橋の
影のうつるを見る時は
引つ返し來るうたてさよ

言葉せはしく「いやとよ」と
森の神は言ひかけぬ。
それらは物の數ならず。
わが司る山山の
森も林もちやちやんこに
伐りちやちやくりて今は早
裸となりぬ。其あとに
苗を栽ゑねばいつ迄も
斯くてぞあらん。斯くてあらば
わが遊ぶべき下蔭の
次第次第にちぢまりて
終に身を置く處さへ
失ひはてん。そを思へば
心ふさぎて、此頃は

うき年月を送るぞ」と
沈みて言ふも哀れなり。
はたと手を打ち「其事よ。
われらも同じ世の中の
その禍に漏るべきや。
砂崩れ来て水上は
底淺くなり、土手をつき、
蛇籠竝べて川裾は
幅狭めつゝ、そろそろと
わが領分をくひへらす
人間わざこそ小憎けれ。
腹立たしさよ。さりながら
はかりごとあり。われ君に
力を貸して、忽ちに

仇を彼等に返すべし。
此企にかたらはん
神多かれど、中んづく
雨の神こそ屈竟の
味方なれ」とて川の神
いと誇りかに膝を打つ。

二

一むら雲の舞ひ落ちて、
はらりはらりと降る雨の
神は川邊に下り立ちぬ。
二人の神がそれそれに
心を碎くもてなしは、
先づ木の實には椽、胡桃、

小栗、椎の實、茱萸、榎の實、
さて草の實は野葡萄や
あけびや外は名も知らぬ
美しき者盛り並べ
松露、茯苓取りそふる。
それにまけじと此方にも
並べし魚は何何ぞ、
緋鯉、黒鯉、鮎、鰻、
姿見にくき山椒魚、
うき名に立ちし紅葉鮒、
泥鰌も鯰もうちませて
只らちもなく散らしたり。
思ひまうけぬとりもちに
笑つばに入りし雨の神の

機嫌うかがひ、おもむろに
川の神先づ言ひ出でぬ。
「われらつらつら人間の
しわざを見るに、義を忘れ
信を失ひ、正しきは
恐と呼ばれ、富みたるは
さかしと言はれ、利を説くを
學者と名づけ、利に就くを
才子と稱へ、善根も
名を得るがため、人情も
利を射るがため、斯く迄も
名利に耽るともがらの
一寸先はうばたまの
闇と残して、目の前の

小利に迷ひ、森を伐り
川を狭くし、われらをば
追ひつめんとぞ計るなる。
憎さも憎し。今こゝに
大洪水を起しつゝ、
慾に目の無き輕薄の
人間ばらを懲らさんと
思ふにつけて、第一に
たのむは君の力なり。
いかにうけひき給ふか」と
説きかけられて雨の神
幾度となくうなづきつ。
「心安かれ。何事も
頼まれてひくわれならず。

今より空に立ち歸り、
口口さつと明け放し
十日も二十日も一月も
雨の源潤るゝ迄
ふりてふりてふり抜くべし。
明日ともいはず今日今宵
おとづれ待てよ。神達」と
勇むけしきに年頃の
うさも忘れて、心よく
汲むや彭祖が菊の酒、
流は盡きぬ谷の水、
雨ひさかたに、山山の
木も榮えよ。と祝ぎて
笑ひ興する聲高し。

十二時の鐘もの凄く、
 二十日の月は登りけり。
 今迄見えし糠星の
 一つ一つに消え行きて、
 風遠き樹を鳴らす音
 次第に近く聞ゆれば、
 月のあたりはただならぬ
 けはしき雲ぞ走りける。
 又一わたり芭蕉吹く
 嵐に月や隠れけん、
 只真黒な空ははや
 闇をこぼるる雨の音

横さまに来て戸を敲く。
 掛け忘れたる干物を
 急ぎ取りこむ間もあらず、
 盆傾けしいきほひは
 屋根に音してすさまじく
 忽ち内は雨漏りて
 壘にはじくここかしこ。
 桶や盥や小鉢まで
 置き並べては狭き家の
 蒲團敷くべきひまもなし。
 夢も結ばで夜は明けぬ
 晝も過ぎて日暮るれども、
 雨のいきほひ加はりて
 更にやむべしとも見えす。

「あつたら今日の商ひを
もとも取らずに潰されし
いまいませよ。悔しきよ。
さもあれ明日は空晴れて
思ひの外の利もあらん。
寐て果報待つ今宵ぞ」と
桶を鄰に臥す夢の
二たび三たび驚きて、
次の日も亦雨暗し。
「ふらばふれふれ。強くふれ
どしどしとふれ。雨の根の
ぬける迄ふれ。晴れしとて
今日の一日を何かせん。
たのむは翌の夜宮なり」

西を見れども雲ばかり、
南を見れど雲ばかり、
心細さを夜もすがら
盪に雨の音牙えて、
うつゝに明けし次の日も
ふり暮しけり。其次の
祭禮の日も日一日
しのつく雨に物淋し。
祭は過ぎぬ。雨は猶
ふりしきりつつ、折々は
風さへ添ひて荒すなり。
鍋、釜、蒲團ことごとく
質に置かれぬ。著物さへ
賣りしろなして今は早

盃をささへん糧もなし。
されども空は猶晴れず

四

戸の外にはかに騒がしく。
走り行く人、歸る人
「水よ。水よ」と叫びたり。
三日前より水防に
手を盡したる何がしの
堤は切れて、川水は
奔馬の如く衝出でぬ。
見る見る水は背戸口を
くぐり來りて、庭さきの
回み回みを盈たしつゝ、

小草を浸し、石を洗ひ、
床の下迄押し行けば
只一面の泥水に
足駄ただよひ、帚浮き
萩も薄も水草と
さそはれつゝぞ騒ぐなる。
いかにせましと妻一人
子を抱きつつ、うろろうと
立ちまどふ程、家ゆるぎ、
水嵩まして、はや床に
水は上りぬ。遁るべき
處も知らず、「助けよ」と
呼びつづくれば、縁先に
一艘の舟漕ぎよせつ、

巡査は彼等を扶け載せ、
忽ち家をはなれけり。
すこし心の静まりて
ふり返り見れば、屋根ばかり
見えつ隠れつ、水漫漫、
我が家もそれと見分たず、
行手をいづくとも知らず。
小き田舟のひよかひよかと
屋根の間を縫ひ行けば、
こは誰が背戸ぞ、日廻りの
花四つ五つ鶏頭の
赤きもまじり、二三寸
水の上にぞ残りける。
「あの花取りて、母様」と

子のむづかるをすかしつゝ、
「大人しくせよ。さもなければ
おまはり様に叱られて、
この恐しき大水に
はふりこまれて流されん。
あな恐し」とささやけど
うき世も知らぬをさな子の
舟遊びする思ひにや、
この珍しき有様を
嬉しがることわりなけれ。
何急ぐにか、あやふげに
盥あやつる棹一つ、
鱸も舳もくるくると、
舟ばたすつて行き違ふ。

そを見つめぬしわらんべは
「あれよ、母様。あれを見よ。
裏の小川で幸ちやんと
一しよに乗つて、龜の子も
一しよに乗つて、其時の
お舟が來たよ。乗らせて」と
いふを叱りて抱きしむる、
うしろに聞ゆる人の聲
騒ぐを何と見返れば
舟は門にぞ著きにける。
繰り返しつゝ、禮いふて、
舟を下りて、避難所の
内にはひればすさまじや、
さしも名だたる大寺の

書院も庫裏も明け放ち、
それに餘りて庭先に
筵敷きつめ小屋をかけ
うづくまり居る數千人、
其かたはらに大釜を
かけ竝べつゝ、焚き出しの
煙うづまく有様は
陣屋の中にさも似たり。
怪我したる人、其親を
失ひし人、いとし子を
流したる人、それぞれに
涙にくるゝあはれさは
いくさの害にも劣らじな。